

飯田市小中連携・一貫教育

令和2年度 実践報告書



2021 年 2 月
小中連携・一貫教育推進委員会
飯田市教育委員会



1 めざす子ども像

「丘の上」に愛着をもち、自主・愛他の精神に満ちた子ども 実現のための3つの目標

①学力・体力の向上 ②人間関係づくりと心の育成 ③地域・家庭との連携

2 取組の重点

テーマ別委員会の取り組みを中心に、各学校において共通理解を図り、共有化してお互いの実践を学び合う。

(1) 授業改善

- ・小中共通の「授業の約束」継続。思考の流れがわかる板書の工夫。授業の振り返りと「書く」活動の積み重ね。
- ・小中一貫した取り組みーコロナ渦ではあるが、ICT機器を積極的に活用し、様々な学習活動（個別学習やグループ学習、繰り返し学習、習熟度に応じた学習、補完的な学習や発展的な学習等）や指導方法の工夫改善を通じて、学びを深め、効果的な関わりのある授業を進める。

(2) 人間関係づくり

- ・相手意識や目的意識の高まりにつながる新たな交流（直接的な交流が難しい中での交流）のあり方を工夫する。

(3) 9年間の教育課程

- ・学力向上委員会や英語外国語委員会やキャリア教育委員会等で9年間を見通しながら、学習の効率化とカリキュラムマネジメントを進める。

(4) 組織の構築

- ・地域の方との協力のあり方について、リモートの活用など新たな方法を進める。（情報発信、意思疎通、意見交換等）

3 取組内容

(1) 授業改善・・・ICT機器を積極的に活用と指導方法の工夫改善

成果 コロナをきっかけに、必要感をもって、ICT機器を積極的に活用することができた。

個別化：個々のタブレット活用（ネット検索、観察記録、グラフ化、写真・動画による課題把握や追究・評価、プログラミング・・・）

共有化：日常的な電子黒板の活用（デジタル教科書、課題把握、状況把握、比較、発表、プレゼン・・・）
タブレットを活用した共同追究（意見・課題の共有、意見交換、グループ課題作成・・・）

【事例1】[ICTの積極的な活用]

2年生の国語「スイミー」の場面を読み取る学習の中で、一人一台のタブレットを活用し、スイミーが悲しかった場面、元気になった海の様子をタブレット（ビスケット）を使って表現することで、プログラミングを学びながら、具体的に海の様子の想像を広げることができた。

3年生の国語「ちいちゃんのかげおくり」で、ちいちゃんの気持ちの変化を全体で話し合う場面

で、児童が電子黒板の本文を自由に前後させながら、大事な叙述に色をつけたりして自分の考えを述べ合うことを通して、友達の意見を理解しながら自分の考えをもち、深めることができた。

中学2年生社会科では室町時代に発展した文化について、建造物名や作品を整理し、室町文化の特徴を見つけ出す。個々に Google ドキュメントを配布し、授業を進めた。教科書や資料集を参考にし、普段より集中して打ち込む生徒の姿が見られた。詳しく知りたい内容を、インターネットで検索し知識を深める生徒やタブレットで写真を撮影しドキュメントに貼り付ける生徒など、各自の願いやこだわりによって、見やすく整理するにはどうすれば良いか考え工夫したり、自分の知りたいことを次々調べる姿があった。文化の特徴をドキュメントに打ち込み、友達の考えを見る活動を通して理解を深める活動を行った。Google ドキュメントを使用したミニドリルも実施の予定。(家庭学習) 今後もタブレットを積極的に活用していきたいが、学習や活用場面によって紙ベースも考えていきたい。



(2)人間関係作り・・・コロナ禍での交流のあり方

成果・・・リモートや制作物による交流、身近な方との交流を工夫して取り組んだ。

小・小、小・中の交流：図書館活動（読み聞かせ・他校への本の紹介）

小6・中3の合唱交流

外部の方との交流：外部講師、地域講師、他校との交流

今後の予定：2小学校の6年生の合唱／合奏の映像を交換。図画、習字を回覧展示する計画。



【事例1】〔リモートの活用による交流〕

人形劇に取り組む小3年生は、リモートを活用しむすび座の方から人形作りや動きの指導を受けた。代表者数名が質問していたが、人形作りが進むと、各自の知りたいことを積極的に質問したり、できた人形を見せたりする姿がみられた。

2年生が運動会で取り組んだカラーガードの外部講師の指導もリモートで数回にわたって行われた。子どもたちは、次のリモート指導までもっとうまくなりたいと練習にも力が入り、講師の先生にもできあがっていく過程を共に喜んでいただいた。運動会の発表で大きな拍手をもらったことから練習の成果が発揮できたことを実感し、講師の先生にお礼の気持ちをビデオレターで送り喜んでいただいたことで、交流の良さを感じ、自信をつけることができ、学習発表も堂々と発表できた。

4年生は、市内でも行っていない南信濃を社会見学の目的地とした。見学前に、リモートで和田小学校4年生と顔合わせした。和田小学校の子どもたちは南信濃や霜月祭のことについて紹介、追手町小



は、自分たちが調べてきた学校の歴史について紹介した。

見学当日、和田城では、和田小の4年生と実際に会うことができ、霜月祭のことを詳しく教えてもらった。

「初めて会ったときは緊張したけど2回目は仲良くなれた。霜月祭の説明はすごくよく分かりました。帰ってから和田小学校の人の発表がどうしてよかったか話し合いました。準備でもう少しみんなで練習できれば、もっとよかったかもしれない。もっと質問したかった。次の交流が楽しみです。」と語った。すでに自分たちの調べたことは学級内で発表し合っている子どもたちだが、相手校の紹介のよさが刺激となり、自分たちの紹介を振り返って課題が見え、相手意識をもつことができた。

霜月祭について知り祭りに関心を持った子どもたちは、「祭新聞を作りたい。」と地域の獅子舞やお練り祭、霜月祭について調べまとめることができた。また、総合の発表会では全校に向けて、学習してきたことをわかりやすく伝えようと、グループで話し合いや練習を重ね、工夫して取り組むことができた。「ことばも考えてははっきりといえてよかった。」という感想を持つことができ、次回の和田小の子どもたちの訪問を楽しみにしている。交流が続いていきそうだ。



【事例1】「(小6) 総合的な学習の時間 飯田の歴史」

4月当初、人形劇に取り組み人形劇フェスタで発表しようとしていた6年生は、コロナでフェスタが中止となり、どうするか話し合った結果、もともと興味があった飯田の歴史について調べようということになった。橋北まると博物館の竹本さん、勝野さんに講師をお願いし授業に来ていただいている。36災害や飯田大火、飯田城、りんご並木のことなどを当時の映像を見たり、直接その場所を見学しに行くなどして、学ぶことができた。地域の方が講師なので担任との打ち合わせが綿密に行われ、地域の方の地域への想いを感じる活動となっている。



【事例2】町づくり学習を中心に展開した修学旅行、英語での実践

○総合的な学習の時間で町づくり学習を行っている。まずりんご並木を中心とした地元飯田市について、さらに他の地域と比較して飯田のよさや課題、飯田のまちづくりを考える学習。今年の修学旅行はこれを活かして地域の魅力・・・①観光を知る(マルダイ大場農園) ②味わう(清流苑) ③自然を満喫する(フォレストアドベンチャー、ヘブンスそのはら、天竜峡) ④歴史を学ぶ(信濃比叡広徳院、満蒙開

拓平和記念館）を体験する旅とした。

「生まれ育った地域について思うこと」

- ・自分が育った地域でも、たくさんの楽しめる場所があることに気づいた。特に、日本一の星空、日本一の観光農園など、日本で最高のものが長野の下伊那にあることを再発見した。
- ・とても距離が近く、行こうと思えば行けるところでありながらも、今まで訪れたことややったことがなかったので、今回体験して、初めて“良さ”と“魅力”を知ることができた。天竜川の昔の姿の話、昼神温泉のこと、日本一の星空のことなど、とても心に残っている。
- ・満蒙開拓平和記念館では、あんなに悲しい歴史があるということを知った。我が子を山などに置いて来るなど、悲しく、自分を恨むしかないのかなあと複雑な気持ちになった。飯田に住んでいる以上、たくさんの歴史を知っていきたいと思った。

飯田・下伊那に対するマイナス的な見方が、プラスに転じ、「飯田・下伊那も意外といいなあと思った」といった内容の感想が多数得られた。この経験を通して、新たな魅力を発見したいという思い、もっと知りたいという思いをもってまちづくり学習を終ることができた。

○英語・外国語委員会 3校共通課題「地域に根ざした題材」

総合的な学習の時間の町づくり学習に関連させて、“There is/are”を使ってオリジナルの街づくりをした。導入場面で、教師の地元や飯田市にある施設を画像で紹介し、「町長のあなたが、町民（級友）の意見を取り入れながら街づくりをする」という課題に取り組んだ。身近な映像から、生徒の関心は高く、意欲的に取り組んだ。この時間は、疑問文の導入だったが、教師－生徒間でのやりとりを通して、「飯田市」と「自分の街」を自然と比較し、警察署が街にない生徒が「治安が悪いなあ～」などとつぶやく姿もみられた。「豊かさ」について考えることで、社会科とも関連しており、教科等横断的な視点でゴールを設定すると、生徒が思考しながら取り組めることがわかった。これまでの授業は、そういった視点で取り組めていたのか。これからもそのような視点を取り入れて、問いを立てていけるとよい。

(4)組織の構築

成果 8月・11月の小中連携職員会議をweb会議ツール Zoom を用いて開催。

資料の作成依頼と提出を Google Classroom を用いて行った。

3 課題

(1)授業改善

- ① コロナという制約により ICT 機器活用に必要感が高まり、本時の授業にこれをどう活かすか工夫することで、子どもにとってどうか考える視点につながったようだ。活用に個人差はあるが、「習うより慣れろ」は重要。今後は授業の質の向上（タブレット端末等をいかに共同追究に活用していくか）に向けた活用の段階へ。接続環境の改善や教師の研修や情報交換は必要。

(2)人間関係作り

- ① 直接交流が難しい状況下で、リモートや制作物等での交流は、相手意識をもって表現したり、表現や交流への意欲を高めたりする。また限られた相手との交流は、子どもたちの中に残るものになった。活動の大きさでなく交流の中での想いを確かめながら、今後直接触れあう交流への期待も大事につなげていきたい。
- ② 直接であれ間接であれ、「応答」する関係性をいかにつくるかが大事。これを通して自己有用感、自己肯定感を高める活動にしていく。キーワードは「きくことができる」ようになること。

(3) 9 年間の教育課程

- ① コロナ禍という制限の中、より身近な課題や地域へ目が向き、自分の生活や育った地域への関心を高める活動ができた。しかし、モノ、コトだけではなく、やはり飯田・下伊那の魅力の一つであるヒトと関われる機会が少なかった。今後、地域の方々と共に活動し人から学ぶ機会を増やし、地域の課題にも気付けるようにし、今日的課題に地域住民の一人として共に考え、行動しようとする学習につながるようにしたい。
- ② 身近な題材を用いることで、英語で表現する意欲は高まったが、コミュニケーションを積極的にとれる姿にはつながらない。積極的なコミュニケーションにつながる要素を見極め、9 年間における指導の具体を考えていく必要がある。

(4)組織の構築

- ① 地域や連携校での、協議や研修は、目的やゴールを明確にし、時間や必要な人員を見極めて効率的に行っていく。リモートでの全体意見交換には課題がある。Google Classroom 及び Google アプリ等（ドキュメント、スプレッドシートなど）便利さが感じられるものから活用していく。
- ② 学校の課題（コロナなど緊急時、行事、150 周年記念など）解決に向け、連携校、CS 学校運営協議会等、情報交換・共有を大事にし、互いにとって力になれる関係を積み重ねたい。

令和2年度実践報告書 飯田西中学校区「実践の成果と課題」

1 めざす子ども像

ふるさとを愛し、ふるさととともに生きている自分を感じ、ふるさとの未来と私の夢を創造していける児童・生徒

2 取組の重点

- (1) 授業改善：「授業で大切にすべきこと」を小中で練り合い統一した授業スタイルを確立
- (2) 人間関係づくり：特別支援教育での連携 小中連携した人間関係づくり（あいさつ運動）
- (3) 9年間の教育課程：地域資源を活用した9年間を貫く「かざこし学習（ふるさと学習）」を推進
- (4) 組織の構築：「小中一貫キャリア教育プロジェクト会議」の子どもに還る実践

3 取組内容と成果

○ 第1回小中連携・一貫キャリア教育合同会議 7月2日（木）15：30～16：45 丸山小

<研修内容>

- 1 コミュニティスクールの目的と組織確認
- 2 昨年度までの小中連携の成果と課題検討
- 3 グループ討議

テーマ「小中連携して取り組んでいきたいこと～9年間の育ちを見通して～」に基づき、A 学力向上（外国語・英語）B（キャリア教育）C 体力向上 D 生活指導（人権 人間関係づくり）E 特別支援 F 地域連携の6グループに分かれて討議した。話の中で「小中教科会への相互参加・英語では統一して取り組む事をきめ出す・リモート活用・専門性を生かした指導を学ぶ・特別支援教育の情報連携等」が話題となった。

○ 小中連携・一貫キャリア教育小委員会（グループ長の協議）

<討議内容>

10月12日（月）16：20 丸山小

- ・小中のグループ担当者が集まり現在までの進展状況や今後の計画等を話し合い発表した。
- ・英語授業改善に向けて小中で指導案を見合い検討し合う。
- ・キャリアパスポートは小中3校で検討中3につなげるように進める。3枚×9年＝27枚とする。
- ・体育学習の前転後転等は例えばデジカメで撮り映像でイメージ化を図るとよい等々が話題となった。

○ 第2回小中連携・一貫キャリア教育合同会議 11月30日（月）13：50～16：40 飯田西中

<研修内容>

- 1 飯田西中全学級公開授業
- 2 グループ討議（成果と課題）

(1) 授業改善

① 学力向上（英語 外国語）グループ

- ・小中が定期的に参観し合い連携を図りながら授業改善を模索している。英語が楽しみになるような活動やチャンツ、リスニングなどでかわる力をつけるための単元設定のあり方を検討してきた。今後、小中合同教科会や指導案の検討等を通して連携して指導のあり方を模索して行こうと考えている。



年度当初、英語の教科科に伴い内容がとても難しく深くなっていたため子どもが情報過多になってしまった。「わからない」「やりたくない」という苦手意識や不安が大きくなり、やる気が感じられない実態があった。教科会等で検討し、教科書の内容を精選し子どもたちが取り組みやすいビンゴゲーム すごろく バトルシップ等のアクティビティーを多く取り入れたり、安心してコミュニケーションができるようデジタル教材やチャンツ、歌等を使い楽しみながら英語にふれる機会を積み重ねたりした。児童は少しずつ苦手意識が和らぎ自己表現しようとする気持ちが生まれてきた。

② 学力向上（総合的な学習の時間）グループ

- ・コロナ禍における「かざこし（ふるさと）学習」の可能性や見直し

→各学年で今年度かざこし学習の中で「実施できたもの」「実施できなかったもの」「実施できなかったが代わりにできたもの」のアンケートとった。回収し分析中。

○実施できたこと

畑や田んぼでの屋外の活動・地域の方との交流（苗植え、野菜の収穫など）・風越登山・職業調べ・オンラインキャリア教育講演会・野菜やお米などの収穫祭・地域貢献活動・高齢者疑似体験等

○実施できなかったこと

4・5・6年の社会見学、宿泊学習での飯田市のPR活動。（不特定多数の人と関わることになってしまうため）・水引の工場見学（断られてしまったため）・大平学習（見学時期にコロナが流行しており行けなかった）・一日職場体験（夏休み短縮のため、受け入れ先がみつからないため）・お菓子作り体験・農業体験・施設訪問等

○代わりにできたこと



4年生は、コロナの影響で水引の工場見学ができなかったので Youtube の動画を参考にしたり 5 年生のペア児童に水引の結び方を教わったりした。上級生に結び方を教えてもらう中で自分たちで結び方を工夫したり何か新たな作品を作ろうと考えたりして主体的な学習へとつながっていった。また、5年生は頼られて笑顔でかかわる姿が見られ役立つ自分を感じることができた。

「達人の生き方に学ぶ かざこし学習キャリア教育オンラインプロジェクト（KCOP）」では、地元だけでなく、日本全国、世界を股にかけ活躍する 14 人の講師と中学生をオンラインで結び、職場を見せていただいたり、お話を聞いたり、質問に答えてもらったりしました。パワーポイントを使って自身の生い立ちや仕事について説明して下さる講師や、演奏や実演をして下さる講師もいました。

講師へのお礼状から、志を持って働く“達人”に強い憧れを持ち、自分の好きなことを大切に、夢や目標を持って毎日を過ごしていきたいという思いを持った生徒の感動が伝わってきました。

中学生のキャリア教育にとって、「大人との出会い」がいかに大きな意義を持つかを実感しました。

今年は制約のある中での活動であったが、ICT を活用したり自分たちで調べて行ったりという形にして取り組んだ活動が多かった。本物に触れる機会は減ってしまったが、既習事項を高学年から学ぶよさや体験活動や外部講師の方に直接話を聞くことで意欲が増し主体的な活動に結びつくことがあった。今後、コロナ禍の活動でできることを見返していく。

- ・キャリアパスポートの検討 年度当初にキャリアパスポートについて申し合わせてある。A4 サイズで学年 5 枚 ワークシート かざこし学習のまとめ、児童が選んだ教科学習の単元のまとめや行事の作文を保存する。ただし今年度はコロナ禍に配慮し小中で最低 3 枚程度に申し合わせた。

- ・リモートによる小中交流授業の推進（かざこし発表会）

（今年度は都合がつかず中止）



(2) 人間関係づくり

① 生活指導グループ

・あいさつの徹底。特に、授業の開始と終わりのあいさつを丁寧に
行うことを、小中足並みをそろえ
て行う。望ましいあいさつや言葉遣



いについて連携しながら生活指導を

実行・小中あいさつ運動への参加、相互訪問

・地区によるあいさつ

標語 ポスターコンクール実施

・中学校の発案によるあいさつキャラクターの選出(小中地域連携)

積
校
の
き
ー
さ
返



小中共に生活目標にあいさつの文言を組み込み児童会や生徒会で
台めに行われるあいさつ運動に中学
生とあいさつを交わしている。年
にかけてもらう事で元気にあいさつで
行っている。小学校では、あいさつカ
の結果、低学年を中心に進んであい
さつの方からは「高学年のあいさつを
どが高学年は進んであいさつができ
ない」などの声がありさらに連携を続けていく事を確認できた。

② 特別支援グループ

・個別の教育支援計画や
個別の指導計画について内容
の共有とフォーマットの共用
について確認した。

・中1ギャップなくスムーズに
移行できる支援体制作りにつ
いて個別の指導計画を元にき
め細かな情報を共有し、進路等

を踏まえ支援のあり方を模索していく。

- ・1学期に、中1ギャップをなくしスムーズに進学できるよう中学校見学と保護者説明会を実施した。
- ・今後中学校での体験学習を実施していく。11/9 自情障 11/11 知障 11/19 自情障
- ・来年度進学状況 知障学級3名 自情障学級5名 学びの場の見直しによる原級復帰1名。
- ・必要に応じて体験を積み重ね本人と保護者が安心して進学できるようサポートしていく。また、個別の指導計画や支援計画等を中学校と共有し連携して支援にあたる。

(3) 9年間の教育課程

児童は「自分の知っている先輩ががんばって勉強している姿に感動した。自分もがんばらなければいけない」「中学生になるとむずかしい勉強をするんだと思った。部活動が楽しみだ」と感想を持った。保護者からは「小学校と中学校との支援学級での学習のあり方がちがうので早くに説明会を開いていただきありがたかった。子どもたちがスムーズに進学できるように体験をさせていただくとありがたい」との声が聞かれた。



ープ

① 体力向上グル

- ・小学校のマット運動に焦点をあて指導上の悩みを共有し、中学の体育の先生と授業を構想している。小学校でマット運動の悩みについてアンケートを実施した。アンケート結果として「苦手な子でも意欲的に取り組めるような指導法がわからない」「前転後転の指導方法」「高学年で苦手意識のある児童支援」「視覚的イメージの持たせ方」等があがってきた。小委員会で以下の確認をした。

<中学との連携>

- ・まず成功体験をつませ苦手意識を克服すること
- ・イメージの支援は特に重要で教師の示範やY o u T u b e、NHK等の動画の活用
- ・中学では授業記録を残し次年度に生かしている。
- ・中学校では技の組み合わせに挑戦。小の段階でやっておきたい技を確認しカリキュラムの見直しを図る。
- ・11月19日 小中合同体育グループ会 伝達研修 マット運動授業記録作成検討
- ・11月24日 小中連携推進部会 課題と成果の討議

(4) 組織の構築

① 地域連携グループ

- ・学校目標を共有し地域と連携しながら行事の参加と見直しを図る。また、小中学校で地域と連携して行っていることの情報交換を実施。11月に地域行事への参加状況把握のための調査を行い地域連携を深めたい。

	地域連携行事	育ちの姿
小学校	・1学期はコロナ禍の状況でできなかった。 ・2年生 夕市グループ大豆や畑作り交流 ・5年生 米作り JAや地域の方 ・放課後子ども教室	土いじりの経験が少ない子どもたちが多くこわごわ畑の土を触っていたが、地域の方に教えてもらい畑作業をする中で土に慣れ楽しくサツマイモ掘りをしたりスイカの収穫をしたりする事ができた。
中学校	・防災訓練、危険箇所、防災グッズの確認 ・放課後学習支援 地域貢献学習 ・地区役員との座談会 ・あいさつ運動キャラクター選出	地域の方と直接話をし一緒に働く経験を通して今の姿を見ていただけた。中学生の活躍を目にし「地域行事に参加してくれることが地域を元気にしてくれる」と話してくださり自己有用感が高まった。

4 課題

(1) 授業改善

- ・小中連携のとりやすい英語を中心にアクティビティーやチャンツを取り入れて英語に親しむことをねらっている。専門性を生かし実態に応じて英語が好きになるような取組を進めたり、合同教科会で交流を図ったりして授業改善を進めていく。

(2) 人間関係づくり

- ・挨拶を柱として統一性、継続性のある指導を進める。引き続き新入生の情報が的確につかめるよう授業参観、体験や個別の指導計画の活用を図る。定期的な特別新教育連絡会を持つ。

(3) 9年間の教育課程

- ・新学習指導要領の資質能力に照らし、コロナ禍での焦点化、重点化を図り「かざこし学習」9年間の見直しを図る。キャリアパスポートについて継続的な検討を進める。
- ・体育のマット運動等専門性が高く苦手意識のある単元の小中連携した指導のあり方を模索する。

(4) 組織連携

- ・6グループの主任がリーダーシップを発揮して小中連携の意義や価値を実感し実践化できるよう校長教頭が小中をつなぐ役割を果たすようマネジメントを進める。(小委員会の推進 連携だより発行)

1 めざす子ども像

「ふるさとを愛し、豊かな心と夢に向かってたくましく生きる力をもった子ども」

(ふるさと意識の醸成 他者意識の育成 自己肯定感の育成)

2 取組の重点

- (1) 緑ヶ丘中学区全職員が参加する小中連携会議では、授業公開と5つの部会を行い、互いに学び合い、授業改善に活かしたり小中連携した取組を行ったりする。(今年度の授業公開は中止)
- (2) 6年生対象の中学校体験入学や小中学校の様子をお便りで知らせることで、安心して中学校に入学できる準備を行うようにする。(体験入学中止、各校説明会と中学校教師による模擬授業)
- (3) 小中連携連絡会や小中合同部会を中心に、小中9年間を見据えたカリキュラム作りを進めていくようにする。
- (4) より多くの地域の方に気軽に学校に入っていただくために、コミュニティスクールのコーディネーターとも連携し、支援してくださる方を見つけていく。

3 取組内容と成果

(1) 授業改善

① 確かな学力を育む取組

- ・ 中学校教師による小学校6年生への出前授業。中学校特別支援学級授業参観、体験学習。
- ・ 小中合同部会で、小中間で指導方法の共有。

② 小中共通した基本的な学習指導・家庭学習のあり方について、予習的な内容や特色ある家庭学習の取組についての情報共有と今後の見通しの検討【学力向上部会】

電子黒板や学習用端末を授業で活用する機会が増えている。様々な事例が出てきていることによって、取捨選択しながら自分の学級の授業に採り入れられている。学習用端末を使った家庭学習での試行も進み、低学年ではアンケート形式の回答方法を採り入れるなど、取り組みやすい環境を各校で整えつつある。また、学校で担任が家庭学習の取り組みの様子も把握しやすくなった。

【竜丘小学校1年生】 宿題が楽しくなった。字を書いたり、写真を撮ったりできてうれしい。できることが増えた。お母さんに「タブレットが使えてすごいね。」と言われ、

③ 外国語専科教員のよりよい活用方法や中学校外国語教員との連携【外国語部会】

ア) 3・4年生の外国語活動の授業は外国語専科教員が授業を進め、専科教員中心に情報発信

5・6年生では、担任が授業を進め、ALTとTT授業を行っている。専科教員はアシスタントとして活動を支え、児童の中に入って学習を進める。会話の相手が3人となり、いろいろな先生と会話したり、話しやすい先生を選んで活動したり、活動の幅が広がっている。



イ) ICTの活用した英語科指導



中学生の学習意欲の向上や理解の深まりにつながってきている。今後も学習用端末の活用を含め、小学校の外国語や中学校の英語学習にICTを活用する方法を、情報交換や研修を行って探っている。

【緑ヶ丘中学校英語教師】 電子黒板を活用して取り組むことを共通理解して進めています。ALTのウィリアム先生は、学習用端末を使って、生徒が英文を書くとき学習した内容と生徒が表現したいことを結びつけられるようにアドバイスをしてくれています。

④ 教育支援主事の役割を活用し、学び方・ICT活用等の情報発信や意見交換

ア) 教育支援主事の高学年授業サポートと評価のスパイラル、高学年中心にTTで授業支援

- 緑中学校区授業の約束「①チャイム着席、②机上すっきり、③聞くとときシーン」の徹底
- 「学習問題、学習課題、まとめ」の明示について、どのクラスも板書及び展開が同じ

○友だちの発表に耳を傾け、よい所は認めたり褒めたりする。自分の考えに取り入れたり、わからないところは質問したりできた場面を担当との情報共有・意見交換

- ・ぼくの考えを友だちが参考にしてくれてうれしかった。
- ・友だちが教えてくれたことで、みんなの前で発表できた。
- ・友だちの考えに質問すると、今まで以上に分かったような気が

○本時の学習問題・見通し・学習課題・まとめが、わかりやすく整理されている。小1年生から中学生までどの教室でもねらいや見通しが明確に進められると、子どもたちにとっても混乱がなくなり意欲的な学びにつながる。



【緑ヶ丘中学校1年生】 どの授業も、授業の流れが決まっていて、安心できる。板書で、学習のポイントがはっきりしていてわかりやすい。

イ) ICT 活用例、学習用端末を使った授業の共有に一役を担う

「拓く」(小中連携通信)の発行を通して各校の ICT 機器や学習用端末を採り入れた学習の紹介、活用例などの情報発信や教職員へアドバイスなど行った。

具体の活動場面で使用した学習シートの種類や取り組み方がわかりやすく、同じように真似て取り組む学級(担任)も見られ、活用に繋がっている。また、教育支援主事の支援により学級・教科担任の授業改善に有効に働いている。

下久堅小学校6年生社会の授業では、「板垣退助・福沢諭吉・伊藤博文・大久保利通」の中から一人を選ぶ場面で学習用端末を活用し、投票結果のグラフを使ってだれに投票したか見合った。フリートークの相手を決め、選んだ理由を聞き合うことを通して、相手や自分の意見の価値の認め合いが自然に進み、どの子も関わりながら学習していた。



【下久堅小学校6年生】 同じ選択をしたBさんから自分とは違う理由を聞き、自分の考えをさらに補強してくれたと喜ぶAさん。ほかの友だちに「Bさんにも聞いてみ、わかりやすくいいよ。」と紹介した。違う選択を聞いて「そうか。その方が大切なことだな。」と聞く相手を変えたCさん。考えが変わらなかった子ども、友だちの選択や理由を聞いて

(2) 人間関係づくり【不登校不適應部会の取り組み】

①小中連携した困り感のある児童生徒への支援の連結や情報交換

各校の取り組みを紹介し合い、有効に働いた支援の方向や支援者について情報交換を進めた。

ア) 学校での居場所づくりと支援内容【竜丘小学校の活用例】

居場所：和室(教室での学習に抵抗を示す児童)、校長室、職員室

支援者：午前は、子と親の相談員 午後は、校長・教頭・養護教諭など

生活：①朝、1日の日程を各自が決める。②相談室では、学習用端末や相談室PCを活用した学習、興味のあることに取り組む。③担任の出した課題に取り組む。自分の能力に合わせて、ネットの講義等を見て学ぶ。④自分の好きなことやりたいことに取り組む。⑤カードゲームを活用して、コミュニケーション力や感情のコントロールを学ぶ。⑥ボール運動、跳び箱、マットなど運動の時間を確保する。 など

留意点：自己決定を尊重する。家庭との連絡を密にし、その日のよい姿を報告。登校を渋ったときには、家庭訪問。

イ) 家庭との連携

無理なく上記の具体的支援や方向を決めだすとき、家庭との支援会議や情報交換は、流動的に設定・運営した。保護者と共にどのような生活づくりをするか相談して改善を試みた。

【保護者】登校を渋っているわが子に、担任の先生はじめ多くの先生にかかわっていただきありがとうございます。本人の様子を見ながら学習など進めていただき、お陰様で登校できるようになりました。

ウ) 教育支援主事、各地区主任民生児童委員との情報交換

月1回定例で、不登校傾向の児童の生活の様子や支援の経過、成長や今後の課題、支援の方向について共有。特に、中学校への支援の接続に有効に働いた。中学校で登校渋りや課題が見られる生徒について、小学校での姿や家庭環境等の背景についての理解も深まった。

②インターネットの利用について小中連携・一貫した指導【生徒指導部会】

○「スマートフォン・インターネットに関わるアンケート」を実施して。

実態把握したことを校内の指導に生かすだけでなく、緑ヶ丘中学校では数値化して保護者へ通知を配布した。スマホの所持率が、学年が上がるにつれて増加する現状で、家庭への意識喚起につながった。また、小学校でもインターネット機器の所有やSNSの利用などインターネットと関わる生活をしている児童が、学校規模に関係なく意外に多いことも把握できた。校内で統一したきまりを、生徒指導部会での意見交換を参考に策定し、情報モラルについて指導してもらうよう各校へ発信できた。加えて、インターネットやSNS利用の職員の危機意識を高めることにも有効に働いている。



【緑ヶ丘中学校の実態】

各校の実態や課題の共有をすることで、共通の意識を持って指導の方向を確認することができ、指導内容やきまり作りに温度差が少なくなりつつある。小学校生活のきまりの温度差を少なくすることにより、中学校生活へのスムーズな移行や規範遵守意識の向上に寄与できる。また、学習用端末利用のきまりについても大人からの制止でなく、自己指導能力を育てていくことによって、中学生になったとき主体的にきまりと向き合うことにつながると考える。

③ 小中間で「ふるさと学習」の取組状況を情報交換する。

○各校の地域に根ざした活動への特化(総合的な学習の時間の積極的推進)。

「拓く」で教育支援主事が情報発信すると共に、教頭同士が連携してHPへ載せたり学校間でお便りを共有したり、相互に情報を発信し合ってきた。プレスリリースも活用して、学校での活動の様子を発信してきた。

【下久堅小3年生】

「こうぞの皮むきは、むいた皮を大事にしなきゃいけないので、簡単そうに見えて意外と難しかった。」(和紙づくり)



【緑ヶ丘中2年生】

「飯田市の伝統文化である水引を教えていただいた。水引にふれ学んだことで楽しさを知ることができた。」(水引)



【松尾小3年生】

「ぼくのカイコは、まゆになりました。ぼくは、さびしく感じました。なんでかという、よう虫だったころのカイコがかわいかったから、かわっちゃうのが



【竜丘小6年生】

「天竜船下りに訪れた人にきれいな鷺流峡を見て楽しんでもらいたいという思いが素敵だなあと思い、心に残りました。」(鷺流峡復活プロジェクト)



コロナ禍でも、もう一度自校の地域を見直して学習素材を探し求めることを各校共通理解しながら推進してきたことにより、新たな取り組みや例年以上の地域との関わりも見られている。

また、学習素材が身近なことや地域の方の存在により、学習に主体的に取り組む姿につながっている。さらに、地域の伝統や文化に触れて、地域を愛する姿につながってきている。

④ 学校と家庭・地域をつなぐ取組

- ・学習等ボランティアの積極的な活用（地域の方、飯田女子短期大学の学生の参加等）
- ・地域行事、地域活動への積極的な参加（地域文化祭、運動会等への小中学生の参加等）
- ・地域の方が学校に入る（学校応援隊、専門性の指導、クラブ活動、学校生活のお手伝い等）

⑤ キャリアパスポートを活用して【キャリア教育部会】

○本年度書式を統一したもので今年度から使用開始。ファイルは紫色紙ファイルで統一し、小 1 から中 3 まで毎年持ち上げる。（学校保管とする）

【キャリアパスポートより】

【松尾小学校 4 年生】（社会見学の前振りから）

- ・僕も優しい人になりたいし、笑顔の多い人になっていきたい。明るい人になりたい。
- ・雨の中で、僕たちの勉強のために教えてくれたり卵をしばらせてくれたりニジマスに触らせてくれて、本当に優しくったから僕も優しい



(3) 9 年間の教育課程

※(1)授業改善、(2)人間関係づくりに含む

(4) 組織の構築

①各校をつなぐ連携会議【連携推進担当(教頭、推進担当)】

○小中連携担当者会

- ・第 1 回： 4 月 13 日…本年度の推進方針や日程について確認。
- ・第 2 回： 2 月 2 日…今年度のまとめ、令和 3 年度の推進について検討。

○小中連携部長会

共通課題の 5 部と、特別支援部会・養護部会で運営を行った。

- ・第 1 回： 7 月 6 日…今年度の方向と各部テーマの確認、各校の現状について情報交換。
- ・第 2 回： 10 月 19 日…各校の進捗状況の確認と情報交換。今後取り組む内容の精査。
- ・第 3 回： 11 月 20 日…各校の取り組みの現状確認と情報交換。成果と課題の洗い出し。
- ・第 4 回： 1 月 19 日…今年度の振り返りと課題の確認。来年度の取り組みの意見交換。

これ以外に、特別支援部会・養護部会は独自で部会を開催し、特別支援部会は、小中接続の部分での支援シートや移行情報の受け渡しの仕方や書式について検討を進めた。



4 課題

- ①生徒指導部会のように、各校の実態を共有して学校生活等のきまりを整理していくことは、中学校を含めた 9 年間の生活づくりに有効である。しかし、具体的にどうに生かしていくのか、各校の職員の意見の集約の方法や各部単位でどこまでガイドラインを設けるかなど、責任を負担することの難しさがある。今後、どう改善できたか、対応したかなどの情報共有は継続したい。
- ②学習用端末を使った家庭学習に視点をあてて取り組んできた。学習意欲の高まりやツールとして扱うことの意欲や主体性に変化が見られた。今後、授業の中で児童生徒の主体的な学びにつながるような教科学習での活用方法や小中連携した情報流通の方法の検討もさらに進めたい。
- ③不登校・不適応児童生徒の支援について、各校の実践を参考にしながら進めてきたが、場所や人材数に差異があり、同じようにできない状況もあった。少しでも登校するよう支援していくことを共通理解しながらも、中学進学後の生活づくりについて、小中の情報共有も必要である。
- ④各部の情報共有は進んだが、回数の少なさから電話連絡やメール等でやりとりしながら情報交換を進めてきた。会議や連絡等の仕方について、今後 ZOOM や Meet、classroom などの活用も進めたい。連携の方向付けや各校をつなぐ連携会議についても検討を進め、改善する必要がある。

1 めざす子ども像

- 自ら考え、人と関わり、進んで行動するたくましい子ども
- ふるさとを誇りに思う心豊かな子ども

2 取り組みの重点

A『ICTの活用の推進』 B『ふるさと学習（キャリア教育）の充実』 C『不登校、不適応対応と未然防止』

(1) 授業改善

- ①ICT教育推進モデル校区として、遠隔システムを活用できるように校区で情報共有しながら取り組み、ICTを活用した授業支援や少人数のよさを生かした学び合いの授業を行う。

(2) 人間関係作り

- ①「新たな不登校を作らない居場所のある楽しい学校、わかる授業（ICT活用）」を大事に未然防止に努め、支援会議に教育支援指導主事が参加し、児童生徒理解を共有する。
- ②小小連携の交流会、合同行事をできる範囲で工夫し仲間づくりを進める。
- ③小中間では安心して入学できる準備を行う。（3年ぶりに龍江小児童の入学がある。）

(3) 9年間の教育課程

- ①「授業の約束」「身につけよう6つの行動」を各校で共通理解、実践する。
- ②地域の人・もの・ことに関わる「ふるさと学習（キャリア教育）」を実践する。
- ③外国語活動、英語に焦点を当て実践研究を進める。

(4) 組織の構築

- ①「第9回ふるさと竜東の集い」の開催。竜東中学校区CS運営協議会の開催、保育園との連携。

3 取組内容と成果

- (1)授業改善・・・成果：教師の変容として、主体的・対話的で深い学びをするためのICT活用への意欲が高まっていた。ICT活用目標は100%に近づいている。（低学年へ対応中、教科担任も健闘中）

【事例1】合同職員会議を通してすべての担任が日常的にICTを活用するように変容していった

- ①第1回合同職員会議（5/20）・・・中止。小小連携として同学年での顔合わせのみ。休校中は千栄小6年生（5名）をテストケースとしてオンライン学活や授業を実践し、その様子を校区の希望職員が参観し、各校で遠隔システムの活用としてできることを行っていこうと同一歩調の取り組みを確認した。校区の会議ではZoomにより行い、校区校長会が率先して行ったり、竜東中では全学年全教科で学習支援オリジナルDVDを作成し12名にタブレットを貸し出したりした。再開後に千代小ではZoomを利用した校長講話やPTA総会等を行い、夏休みには千栄小6年生に学校のタブレットを貸し出し、クロームを使った健康観察、アンケート集計、宿題や日記の家庭配信と収集を行った。これらの内容を校区で周知していった。8/19南信教育事務所主催のICT出前講座を竜東中で行い参加の呼びかけをした。（11/262回目の出前講座は竜東中と千代小合同実施）

校区の取り組みの重点として、できることを増やしていこうと実践を進める中、A教諭「苦手、負担感しかない」とICT活用に苦手意識の職員もおり、その対応は各校に任されていて、学校間や個人により差が出ていた。

- ②第2回合同職員会（9/2）・・・千栄小では全ての学級でタブレットを使うなどICTを活用した授業公開を行った。その後、学年別授業研究会や『学力向上ICT推進部』が行われ、9月末に一人一台配布されるタブレットを活用していこうとする必要感と意欲がもてる会となった。



職員の感想／・こんな使い方ならできそうというアイデアをもらった。低学年でもできそう。

- ・自分が使ったことのない活用をしていたので、これからの単元の中で実践してみたい。
- ・A教諭「今までは電子黒板でデジタル教科書を利用していたが、千栄小ではすでに一人一台のタブレットを活用していて驚いた。自分は苦手だけど使えるようにしないとイケない。」

- ③ICT中核教員による校内研修・中核教員同士の連携・・・各校で校内研修が進められる中、校区の中核教員同士で連携をとり合う姿が見られた。10/26竜東中では校区に呼びかけ、貸与されたタブレットを使って社会科

の授業公開を行った。(資料提示、スライドで共同編集、フォーム)

職員の感想／・歴史は小6でも扱うが、定着していないと感じる場面があった。授業のねらいを明確にして、力をつけて卒業させたい。タブレットの使い方まで今日学んだことを自校の職員研修で職員に伝達します。
・生徒が使い慣れていて驚いた。授業の振り返りにフォームを使ってみたい。

④第3回合同職員会(11/11)・・・上久堅小5年社会科の授業公開をオンラインで行った。(東原義訓先生や市教委の皆様の多大なるお力をいただき実施) 児童はJamboardで貼り付けた自分の考えを仲間分けして名前を付ける共同編集を行った。3台のカメラで配信され、参観者は気づいたことをスプレッドシートにどんどん書き込んでいった。その後、シートをもとに焦点化された授業研究会が行われた。

児童の姿／・どの子もとても真剣に、意欲的に取り組み、共同編集の場面では話し合いながら追究していた。・授業後には「楽しかった」とつぶやいていた。

職員の感想／・児童の真剣で意欲的な姿からICTの可能性を感じた。
・Jamboardの効果的な活用の仕方が分かった。授業で使ってみよう。
・端末の振り返りにフォームの利用はとってもよいと思う。しかし、スプレッドシートで友達の考えを見ながら書くのではなく、自分に向き合うような時間をとるようにして入力したらどうだろうか。
・A教諭「タブレットを活用して、どの子も主体的に取り組んでいてよかった。自分も中核教員の先生に放課後お願いしてスプレッドシート等の使い方を教えてもらい授業で使えるようになってきた。他にも教えてもらい活用したい。」



○東原先生からは「研修会の様子から、昨年より先生方の技能が上がってきた。やりとりの内容もレベルアップしていた。学びの深化、学びの転換に向け、環境が整ってきたので、使えるツールを増やし、校区での連携した取り組みをこれからも大事にしてほしい。」効果的な実践について今後も校区で情報共有していきたい。

(2)人間関係作り・・・成果：ICTの活用が、不登校生が一步踏み出す支援になっている。

【事例2】ICTを活用し、共同編集することで、登校への意識が変化した竜東中2年B生

①1年次の様子：文化祭発表への苦手意識、強い上級生や女子との関わり、不安などの理由から、2学期より休み始め、学級と関わることはできない。1月から飯田東中の中間教室に週一通う。2月から週一1時間別室登校。
②2年次の様子：4月に校内中間教室ができ、『スタディサプリ』を活用して個別の学習を始めたところ週二登校し、2学期からは東中中間教室をやめて週三登校へ。(対応は加配教員と、教育支援指導主事、担任)

1学期末の保護者アンケート／中間教室を作ってくれたおかげで、学校に行けるようになりました。他の友達とは会っていませんが、一人でのパソコン授業は集中して出来ると言っています。まだ教室にもどれるとは思えませんが、頑張ってくれる事を願っています。(母)

③タブレット配布後の様子：担任が校内中間教室でB生にタブレットの使い方を説明する中で、学級でのスプレッドシートを使った“しりとり”に誘った。「顔を見せるのはちょっといやだけど、文字ならいいよ」と中間教室から久しぶりにクラスの友達とオンラインでつながり笑顔を見せていた。

B生「久しぶりにみんなと授業をしたときはちょっと緊張したけど、みんなと同じことができたのはよかった。」

これなら道徳でもつながることができるかもと考えた担任は、翌週の道徳に誘った。『じこちゅう(光村2年)』で「考えの違いを尊重するためにどんなことが大切なのか」について友達の考えを見てみないかなと投げかけたところ、「文字だけなら」と自分の考えを入力した。その後学級では全員の考えをもとにさらに考えを深めていった。B生の画像は流さないが、学級からはZoomで授業の様子や板書を流した。

B生「その人のいろんなことに気を配って生活する。見える場面だけでなく見えない場面にも気を配ってみる。わかってもらえるようにちゃんと伝える。」と記述し、端末には「面と向かうとできないけど、みんなの考えが聞けるのはよかった。参加しやすいし、楽しかった。」と感想を教育支援指導主事に伝えた。

クラスの友達「B君が来てくれてすごうれしかった。B君が今、何を打っているかわかって、離れていてもすごく身近に感じた。」「離れていても、同じことをB君も考えていて、考えがわかりあってうれしかった。」

タブレット使った授業についてB生「クラスの人と直接しゃべるのは少し抵抗があるけど、文字ならやりとりしやすい。離れていてもみんなと同じ作業ができてうれしい。顔を合わせなくても話し合いができるのはすごい。」と話し、3学期は週四(火水木金)校内中間教室に通いたいと方向を伝えてくれた。

3学期になり、自分のペースを大事にし、学級との関係づくりを広げながら週四日の登校が続いている。

- 安心して自分の考えを伝えられることは、自己肯定感や自己有用感を高めていくものにつながる、ICTの可能性を利用しながら、日常的に授業を通して考えを認め合う学級作りを進めたい。
- 他にも、小学校では完全不登校児と1回Zoomでつながったことから、数日登校できるようになった事例、教室に入れず別室にいる児童に、Zoomで授業の様子を流して、不安感を取り除くようにした事例もあり、ICTによる可能性を感じている。様々な活用についても考えてきたい。

【事例3】コロナ禍で工夫し、合同行事のよさを感じた小小連携の交流会

- ①4年合同社会見学(11/20)・・・当番校：千栄小〔長野市→松本、諏訪へ変更〕
Zoomでの事前学習。当日は当番の千栄小3人が3つの班の班長になり、進んでグループを引き連れる様子を見ると、友達の気持ちを汲みながらどのように自分を主張したらいいか、他の子ども達への配慮等多くのことを学べた。



日記より／・他の学校の保健係の人がいつも『元気ですか』ときいてくれて、うれしかった。

・初めての班長で、最初はどうか困ったけれど、みんなが協力してくれたから、自分としてはうまくいったと思う。5年生の見学が楽しみ。

- ②5年合同社会見学(10/20)・・・当番校：上久堅小〔愛知県→駒ヶ岳ロープウェイ、セイコーエプソンものづくり歴史館へ変更〕 Zoomでの事前学習。当日は各校1～2名の班で交流が深められた。

日記より／・社会見学でした。僕は3つ学びました。 中略 3つめは交流です。3校でやっているので交流も大切です。僕はすぐにCさんとDさんと話すことができました。うれしかったです。次は6年生の時に会うので、そのときもしっかり交流したいです。

- 小中間では、来年度は龍江小からの入学者もあり、教育支援指導主事は担当外ではあるが、月に1回龍江小訪問を行い安心して入学できる準備を行っている。校区小学校の情報を適宜いただけるのでありがたい。
- 『人間関係づくり部』では、「9か年の個別シート」の改良をしたので、今年度より改訂版を中学へ送る。

- (3)9年間の教育課程・・・成果：コロナ禍だからこそ地域との連携を大事にした「ふるさと学習」が全ての学校で展開できた。

【事例4】地域の人・もの・こととのつながりを大切にした地域題材

- ①地域を知る授業(9/2)・・・千代小では、よこね田んぼ保全委員会会長 関口俊博さん(法全寺)から、よこね田んぼの歴史や、よこね田んぼに寄せる地域の方の思い等について講話をしていただいた。



児童の感想／・江戸時代からあったなんて知らなかったです。今度の稲刈りもがんばります。(2年女児)

・古くから伝わる田んぼをいろんな人たちが守ってきたことを知ってすごいと思った。私が稲刈りをするときは、ありがとうという気持ちで稲刈りをしたいです。(3年女児)

・よこね田んぼの由来の漢字には、どれも人々の思いがこもっているような漢字だった。(4年女児)

・ぼくの家はよこね田んぼの奥にあるので、いつも学校へ行く時帰る時にきれいな風景が見られます。夕方になると赤オレンジっぽい色になってとてもきれいです。(6年男児)

・今まで地域の人たちがたくさん工夫し頑張ったから「今はこんなにきれいなんだ」と思いました。これから地域の人たちとこのままのよこね田んぼを次へ繋ぎたいです。(6年女児)

このあと行われたよこね田んぼの稲刈り(千代小、千栄小、竜東中1年)にも、意欲的に取り組むことができた。地域の方の言葉には、地域を愛する思いが込められており、自分の住んでいるふるさとを誇りに思う心情が深まった。今後は校歌について学んでいく。2学期は千栄小では総合での校内研究会(五平餅、千代ネギ販売)、上久堅小でも地域講師を招いて北田遺跡見学、小野子人参収穫などの「ふるさと学習」がコロナ禍ではあるが地域と連携して進められた。

- ②竜東キャリアフェス(10/9)・・・竜東中では、1年職場見学と2年職場体験学習が中止となった。キャリア教育をどのように展開していけばいいか校内で話し合い、連学年で地元の6事業所(ふれあい農園おた、岡本養豚、飯田市立病院、千代・龍江駐在所、マルヒ(株)、上久堅保育園、飯田子育て支援課)から8名をお招きし、生徒が交渉、進行するなど主体性をもたせて実施した。



生徒の感想／・保育園ではとても子どものことを考えて、大切にしていることが分かったし「子どもが人が自分が好きであること」というお話を聞いて、私はもっと自分を好きになれたらいいなと思いました。

- ・農家民泊で農業で人と繋ることができることのよさ、人は人との出会いで変わるなどの話が心に残っています。どこの高校にはいっても絶対に人生の役に立つことがわかりました。田舎にもこんなよいことがあるとは気づきませんでした。
- ・1つの製品を作るのに何週間、何か月とすごい年月をかけているし、「何にでもチャレンジ」という言葉が一番心に残っています。新しい技術を作り出すことは大変だけどすごく楽しそうだなと思いました。

- 「英語、外国語学習部」の取り組みとして、・中学校の英語担当教諭が各小学校6年生対象の授業を行う。
- ・ALT がいないときの担任だけの授業参観をし、互いに学び合う。
 - ・評価についての検討をし来年度に向けて評価基準を作成していく。

(4)組織の構築・・・成果：新しい形で「ふるさと竜東の集い」を中核にした地域との連携の継続ができた。

【事例5】コロナ禍の中、時間や内容を縮減工夫し、文化祭の中で実施した第9回ふるさと竜東の集い

- ・7/19（日）中止 → 9/25（金）の文化祭「意見文発表」に竜東の集いを兼ねて実施。
- ・テーマ「つながろう竜東魂」とし、6年生が参加し、「ふるさと学習」で学んだことを発表。中学生はアンケートから「これから竜東地区とつながっていくために私たちができること」の発表。地域代表として卒業生で市教委勤務の島田さんの発表を聞いてから意見交換を行う。コロナ禍で多くの行事が中止となり、文化祭も来賓をご招待しない学校が多い中、学校運営協議会の皆様と協議を進め、ご理解をいただき、地域代表という形で出席いただいた。70分という時間であったが、充実した会となった。



地域の方から／・コロナ禍の中、コンパクトで内容もとてもよかった。

- ・小学生に発言を求められたとき、2人が勇気を出して手をまっすぐ上げしっかりした声で発言していました。きっと中学生の活発な姿を見て心に伝わり行動を起こさせたまさに繋がった瞬間だったと思います。
- ・各小学校で先生方が積極的に地域のことを教育に取り入れていただいている、それぞれの地域に対する思いが伝わってきました。中学生の発表は今後の地域課題を考える上で参考とさせていただきたい。

その後千代地区では自治会で中学生のパワーポイントを見て意見交換をする会を持った。基本構想と一致する部分もあり、さらに中学生と懇談したいという要望が伝えられた。

4 課題

(1)授業改善

- ・ICT活用については多くの可能性を信じてより深い学びに結びつく活用方法について研修を積み重ねたい。
- 10月に、竜東中のSNS利用について小学校に配布した。今後起こりうるSNSトラブル対応やルール作りについても小中連携して取り組みたい。

(2)人間関係作り

- ・教育支援指導主事の支援会議同席や小中情報共有が行われたことは大変有効であった。少人数の良さを生かす教育と他学年や他校との合同授業による良さも整理しながら交流学习を進めていきたい。

(3)9年間の教育課程

- ・「授業の約束」「身につけよう6つの行動」を掲示しておくだけでなく、実践と見返しをしていく。
- ・英語、外国語教育については12月以降の授業参観をいかし、ALTが同じという利点を生かして中学入学が英語によってスムーズになるような授業のまとめを行っていく。

(4)組織の構築

- ・第9回ふるさと竜東の集いは、文化祭の意見文発表と兼ねて実施することに、地域の方のご理解をいただきながら学校主体に準備を進めてきた。内容的にはマンネリ化から脱し充実した会となったが、課題として、地域の方と直接話しができる分散会のよさも改めて感じた。コロナ禍であっても活動が続けていきたいが、文化祭の中で行うと主体が曖昧になることもあり、方法については学校運営協議会でもさらに考え合っていきたい。

1 めざす子ども像

ふるさと竜峡を愛し、自ら考え、たくましく生きる子ども
～ ふれ合い つながり 織りなす 子ども達 ～

2 取組の重点

(1)「授業改善」学力・体力の向上

- ①学習課題の明確化と学力向上につながる振り返り（見とどけ対話）の実践。
- ②学力向上につながる家庭学習のあり方の実践。

(2)人間関係づくりと中一ギャップへの対応

- ①特別支援学級在籍児童の中学校進学に向けての綿密かつ丁寧な小中連携。
- ②特別な支援が必要となるであろう児童、不登校傾向または不登校が心配される児童について共通理解をし、支援について小中の連携を図る。
- ③小小交流及び小小合同学習の計画推進、中学校体験等の小6・中1の交流の推進。

(3)9年間の教育課程

- ①総合的なキャリア・パスポートの推進。
- ②英語についての小中の連携と新しい教科書に応じたカリキュラムの見直し。

(4)組織の構築

- ①今ある組織を活かし、竜峡中学校区の小中学校との連携と効率的な運用のためのコミュニティースクールづくりの推進。

3 取組内容と成果

(1) 授業改善

- ①各校で授業の振り返り、「見とどけ対話」を軸とした研究を進め事例研究を行う。

【学力向上委員会】

「見とどけ対話」とは

学びの自覚化と既習の定着をはかるために、授業の終末の場面において、わかったこと（まとめ）を級友に自分の言葉で対話を通して説明する。

※児童生徒が定着をはかるとともに教師は定着を見とどけることができる。振り返りの時間の確保が充分でなく、設けても振り返りの記述のみであったり、数名の発言のみであったりし、発言しない子どもの見とどけができずにいた授業も多かったと思われる。終末の場面で一人一人が級友と関わることで、子どもの様子を捉えたいと考えた。

【龍江小】○学習用PCを用いた見とどけ対話の実践〈5年〉

道徳「ドッジボール対決」で、互いを高め合える友情について考え、授業を通して、自分や級友の考えがどのように広がったり深まったりしたかを振り返った。



〈成果と課題〉子どもの変容の姿から

- ・『互いを高め合える友情』について、K児は当初「なんでも話せる友情」と記入した。
- ・その後、スプレッドシートに記入したことについて、児童同士が質問し合い、K児は、H児に「何でも話せるって、例えばどういうこと？」と尋ねられるが、答えられずにいた。H児は「いいこととか、悪いこととかもかなあ」と独り言のようにつぶやいた。終末に再度「お互いを高め合える友情とは？」についてまとめた。K児は「言いにくいことでも、注意し合える友情」と記入した。H児の独り言のようなつぶやきを聞き、K児が自分なりに考え、「なんでも」をより具体的に表したといえる。
- ・「見とどけ対話」におけるスプレッドシートの活用は、各校で実践され、以下の点で有効なことがわかってきた。①口頭による表現が苦手な児童の考えを全体に位置付けられ、該当児童も自信を持てた。②自分の考えでのまとめが苦手な児童も、友の記述を参考にできた。③教師側では、見とどけの内容を類型化しやすく、授業後の分析や次時への問題提起等の繋がりを持たせやすい。それが学習意欲への高まりにつながっている。課題としては、ICT機器への習熟の違いや学年の発達段階に応じた取り組みが求められる。

③ 【川路小】昨年度作成したフィールダーベースボールのハンドブックを活用した授業実践をととしての授業改善とハンドブックの修正〈5・6年生〉 【体育委員会】

・授業の中で「遠くまで打ちたい」「ヒットを打ちたい」という願いや、失点を減らせるよう「守備を工夫したい」という願いをもつ児童が出てきた。そこで、次のような工夫を試みた。

- ・バット操作について教え合いながらチームごとに打撃練習を行う。
- ・外野から内野への守備の連携について作戦を立てる。
- ・ゲーム中は声の連携も大切にしよう指導する。
- ・ランナーよりも先回りしてアウトサークルにボールを持ち込めばアウトとする。
- ・次の打者の打撃まで塁に残れることとする。



＜成果と課題＞子どもの変容の姿から

児童の感想から

- 守備が最初のころよりかなり良くなってきたのでうれしかったです。
- 今日はルールを変えてやってみました。最初は少しわからないルールもあったけど、やっているうちにだんだんと分かってきて、楽しくやることができました。

- ・攻撃側ランナーを返すため、投打のみでなく、打つ方向や強弱を考えて打てばよいことに気付き打撃の工夫、守備は進塁させないため、どこでアウトをとるかを判断するなどの楽しさを味わえた。
- ・児童は攻守の戦術の必要性に気付き、技能に応じたルール変更の提案が聞かれ、今後もベースボール型の運動に携わり楽しみたいという願いを持てた。また、チームで連携することの楽しさや大切さを実感した児童も多く見られた。

今後の方向としては、次の2点が挙げられる。

- ・児童の技能や発達段階に応じたルール変更の例、攻守の戦術例やチームの戦術を考えるポイントの掲載等、ハンドブックを更新する。
- ・「投げる」「捕る」の技能は他の種目や遊びの中でも意識的に取組み、継続的な技能の向上を図る。

（2）人間関係づくりと中一ギャップへの対応

【合同学年会 特別支援教育推進委員会 教務主任部会】

① 中学校特別支援学級への入級を検討している6年生児童（現在1名）についての情報交換を図る。 【合同学年会 合同職員会 特別支援教育推進委員会】

- ・合同学年会で、6年生児童（1名）について、個別の支援指導計画をもとに、情報共有。
- ・同学年の子ども達の様子や授業進度、有効だった教材や指導法について情報交換。
- ・4年生では3校合同社会見学を、5年生では2校（川路・三穂小）合同臨海学習を例年実施（今年度は各小学校で単独で実施）。

② 特別な支援が必要とされる児童、不登校傾向又は不登校が心配される児童についての共通理解を図る。

【特別支援教育推進委員会】

- ・1月に小学校の授業参観を実施予定。
- ・個別支援・指導計画シートをもとに支援策についての確認を行った。

③ 各小中学校間の交流活動

【合同学年会 合同職員会】

- ・11月に中学校体験入学（授業体験、中学1年生による合唱発表および学校説明）を、実施した。

〈小学生〉

- ・わかりやすい説明だったので、中学校生活の内容がよく分かりました。歌もとてもきれいな歌声で素晴らしかったです。
- ・中学生生活がどんな感じがよく分かったので安心しました。
- ・中学校生活の劇も分かりやすく、中学生になるのがとても楽しみになりました。

〈中学生〉

- ・「来年はどんな人が来るのかな」と楽しみにしていました。会うだけでも楽しみでした。来年新一年生が来るとなると私たちは2年です。先輩になります。楽しみだけど不安もあります。堂々と先輩と言えるように頑張りたいです。



全体会での合唱発表

小学6年生にとっては、中学校生活の不安を少しでも払拭し、安心感と希望をもち、昨年6年生として頑張ってきた先輩の成長ぶり見て、自分たちの成長を願う姿が期待できるよさも感じられた。中学1年生にとっては、昨年の思い出し、1年間の成長とともに先輩になり、中学校を支えようとする自覚を促すことにつながっている。

(3) 9年間の教育課程

- ① 9年間を通して「ふるさと竜峡を愛する」子どもの育成となるよう、各小中学校の総合的な学習の時間の取組やキャリア教育について情報を共有し、より系統的な活動となるよう活動内容の見直しを図る。 【総合的な学習・キャリア教育のカリキュラム作成委員会】

○キャリア教育イメージ図（右図）の独立

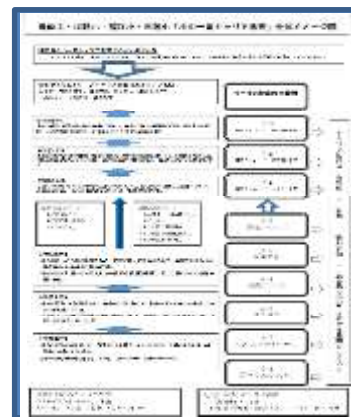
昨年度作成したイメージ図をもとに実施していく予定であったが、コロナ禍においては、計画通りに実施することが難しかった。

○総合的な学習の時間の取組

～コロナ禍でふるさと竜峡を愛する児童生徒を育てるには～

各小学校では、校外での活動や人との関わりが制限される中、日常の事象や事例について考えるなど学習展開の工夫が見られた。また、保護者の協力を得て、職場見学を実施できた例もあった。

さらに、地域のものやひと・こととつながる総合的な学習の時間もそれぞれの学校で工夫して実践され、地域のよさを再認識する学びへとつながっていると考える。



【川路小】



アカマツ林再生作業

【龍江小】



清水川に生息する生き物探し

【三穂小】



人形劇団「みほっこ」

【竜峡中】

当初計画していた、地域ごとの縦割り探究活動（竜峡タイム）の実施が難しかったため、キャリア教育に関わり、イメージ図に沿って各学年で活動を行った。

- 1 学年・・・小学校での学習を土台にしながら、それぞれの地域（三穂・龍江・川路）の良さについて調べ学習。
- 2 学年・・・職業調べ。職業の特徴、その職に就くまでの進路や進学先についても調べた。
- 3 学年・・・修学旅行の代替行事に向けての平和学習（満蒙開拓）。および高齢者疑似体験。

- ② 各小中学校の外国語・英語教育の取組について情報共有を図ると共に、7年間の外国語・英語教育中で地域のことに触れられる単元や活動を探る。 【外国語教育カリキュラム委員会】

【川路小】 ○竜峡中学校区の共通の指導観に基づいた授業の実践（5年生）

昨年度明らかになった以下の共通の指導観4点を大事にした授業が行われた。

竜峡中学校区共通の指導観

- ア 単元を通して、他者を意識した活動を据え、学習の目的と見通しを児童生徒に持たせる。
- イ 児童生徒との対話活動をしなが、新しい表現を導入し、実際に対話させることで、「言いたいけれど、言えないこと」をはっきりさせる。
- ウ 既習表現をもとに考え合わせることで、子どもの「気づき」を促し、適切な表現を学ばせる。
- エ 最後の5分で、振り返り、「わかったこと」「友から学んだこと」「まだよくわからないこと」などを自覚させるとともに、次時に活かす。



<成果と課題> 子どもの変容の姿から

○イ・ウについて

- ・児童に使わせたい表現を盛り込んだ対話を教師同士（担任・AET）が行うなかで、児童に質問したり、考え合わせたりするなど児童を巻き込んだやりとりが行われた。このやりとりで使われた表現を、中心活動の中で児童が頻繁に使用する姿が見られた。

○エについて

- ・Today's Goal. に沿った買い手としての評価だけでなく、売り手としての自分、更に仲間のよさに言及

した振り返りができた。

- ・「あまり辛い料理を見つけて買えた。」「味などもしっかり聞けた。」の部分全体を共有しながら、買い手として有効だった表現を確認し合うことができれば、より実践に即した表現が全体で共有できたと思われる。

○今後へ向けて

小中連携の意味で共通の指導観に基づく授業は有効であると考えられる。Small Talk とその考え方を活かした授業の流れを小中の接続を含めて継続していきたい。

授業を通して見えてきた課題として、①本時使わせたい表現を吟味すること、②「言いたいけれど言えないこと」を持たせ、それらを解決するための方法を検討することの2点が挙げられる。

【児童の振り返り】

(抜粋)あまり辛い料理を見つけて買えたので良かったです。味などもしっかり聞けて良かったです。Mさんのお店に行ったら、すごいスムーズに質問に答えてくれたのがいいと思いました。



その他、小中で扱われる同一題材を分析し、地域とつなぐことについては、来年度教科書の指導シラバスを基に、小中の接続の新しい形を検討した。今後実施予定の内容は以下の通りである。

1. 12月から1月にかけて、中学校英語教師が自己紹介の映像を作成し、各小学校へ配信。
2. 各小学校では、これまで用いた表現で、自己紹介スピーチ原稿とスピーチを準備する。
3. 中学入学後の授業で伝え合う。
4. 生徒の紹介文を用い、小学校の学びを振り返る。内容のやりとりを通して、語順や文法などへ意識を向けられるよう工夫する。

(4) 組織の構築

【教頭部会】

- ① 各組織のあり方について見返しと取組の重点についての絞り込みを図る。
 - ・竜峡中学校区ならではの活動およびICT活用の取組の重点の絞り込み。
 - ・将来的な「竜峡中学校区コミュニティースクール」の発足に向けた検討と準備。昨年度に引き続き今年度は、竜峡中学校の学校運営協議会に、小学校の校長が参加するという形で第一歩を歩み始めた。12月の中学校運営協議会時に参加していただく予定である。

4 課 題

(1) 授業改善

昨年度に引き続き、その授業で児童生徒が学んだことの自覚がはかれるように進めていく。そのために「振り返り」の場を日常的に位置付けることとそのよさを実感させる必要があると思われる。さらに本時の授業で「ねらい」を明らかにして日々の授業を構想し、実践することが、「振り返り」の場を充実させることにつながることは明らかであろう。グループ内の発表後、全体の場での発表にどうつなげていくか、ねらいを教師が児童生徒にどのように位置付けるかという課題も残っている。今後はこのことに留意していきたい。

〈今後の課題〉…児童生徒がより学びを自覚できる振り返りの場はどうあったらよいか。

…学習用PCを活用したより効果的な家庭学習のあり方を研究していく。

(2) 人間関係づくり

3つの小学校の支援計画書を統一した形式にしていくことで、中学校への継続的な支援がしやすくなるのではないかと考え、形式を検討している。

(3) 9年間の教育課程

- ・外国語のカリキュラムづくりでは、題材と地域をつなげる視点で教科書をつなぐのであれば、小中の新教科書をチームで分析することが有効だと考えられる。
- ・キャリア教育の充実に向け、子どもの発達段階に応じて準備を進めていく。
- ・総合的な学習の時間では、課題として、地域の方々の高齢化が進み、関わってくださる方の人材不足が懸念される。新たな人材の発掘が要求される。

(4) 組織の構築

龍江、川路、三穂とそれぞれ地域の力がしっかりとっている3つの地区をまとめながら地域の力をより活かせるような組織作りをしていきたいが難しい。

1 めざす子ども像 『人々に学び、強く豊かに育つ 伊賀良・山本の子ども』

《 自立した学習者として育つ 》

学習課題を持ち、友と積極的に関わって「学ぶ力」を高めていく児童生徒

《 市民社会の一員として育つ 》

伊賀良・山本の「ひと・こと・もの」と積極的にかかわって学び、地域とともに生きていく児童生徒

《 夢・志に向かって育つ 》

将来の夢と志を抱き、基本的な生活習慣を大切に生き生きとした日常生活を過ごす児童生徒

2 取組の重点

「探索期」「深耕期」8年間の総括を受け、「充実期」2年目として、

- (1) 小中連携・一貫教育のめざすところを校区全職員で共有し、
- (2) 8つの各委員会・部会の取組を見直し、活動を推進することを通して、
- (3) 具体的な子どもの変容に着目し、数値やエピソードで実践記録を積み重ねていく。

3 取組内容と成果 ※ICT 活用に関わる取組については報告記述中に下線部で示している。

(1) 授業改善 【(3)9年間の教育課程を含む】

① 「旭ヶ丘中学校区学習スタイル」の確かな実践とICTを活用した「わかりやすく学びやすい環境づくり」

【学習スタイル検討委員会】

□個に応じた学習環境を提供するための指導研究

インクルーシブの観点に立ち、ユニバーサルデザインを意識した指導の試行とその過程や結果を職員間での共有

□生徒児童自身が自己の振り返りをして学力をつけるためのPDCAサイクル構築

取組の成果

●ユニバーサルデザインを意識した指導の試行

- ・ 学習の流れを PowerPoint で提示して見通しを持たせる。(旭中)・単元のゴールを明確にして子供たちに伝えて授業をすすめる。(山本小)
→ やることが分かり意欲的に活動する姿があった。
- ・ デジタル教科書や PowerPoint を利用して、音声や映像・画像を使って、聴覚的、視覚的に内容を提示する。或いは資料を提示する。(旭中)・考える拠り所となるための写真、言葉カードの利用。(山本小)
→ 文字だけでは具体的にイメージできない子どもたちから「分かった」の声が出た。
- ・ 電子黒板で「大切なこと」を確認する。(山本小)
→ ポイントを視覚的に確認でき、それに沿って活動できるようになってきている。

- ・ 各教科担任等の作成した教材や学習カードを共有財産として運用する。(旭中)
→ 担任や教科担任によって授業の展開は違ってもよいが、ある程度足並みをそろえておくことが、学級差を生まず、教科内での教材研究になると共に教材研究の時間の短縮にもつながっている。
- ・ 「ばらで買う」の「ばら」、「〇〇をふまえて」の「ふまえて」の意味が分からず答えられない等の語彙力の不足を補うための教材の利用。(例「ことばあそび」) MIM アセスメントへの協力。(伊賀良小)
→ 子どもたちのつまづきにに応じた指導ができた。
- ・ 動物園と ZOOM でつながった授業の実施。(山本小)
→ 画面を通した相手とどう向き合えばよいのかの学習になった。

●3 観点「ねらい」「めりはり」「みとどけ」と PDCA サイクルを意識した授業展開

- ・本時の終末のまとめや結果を次回の内容と繋げて授業を展開する。(旭中)・「未来算数」と名付けて家庭の理解を図りながら反転的授業を実践した。(伊賀良小)
 - 考えることを先に家でやってくるので、子どもたちのしゃべる時間が長くなった。
 - 自分なりの言葉や図を使って、答えにたどり着くまでの道筋を表現していた。
- ・振り返りカードの共通化や書き易く簡略化をはかる。(旭中)・まとめや発展として、紹介カードや新聞を作る。(旭中)
 - 理解できたことが明確になり、定着の可能性が高くなる。

●協働的な学び（「学び合い」「旭の8分」）の取り組み

- ・考えを書いた学習カードをローテーションして読み合い、付箋などをつけて意見交換する。・それぞれの考えを付箋に書いたり黒板にカードを貼ったりしてお互いの意見を交流する。・スタディノートを使い、タブレットにそれぞれの考えを書いて、電子黒板に集約して意見交換をする。・ホワイトボードを使って個人からグループへとという流れをつくる。(旭中)
 - 新型コロナウイルス感染防止対策として、対面で話をするのを避けるために実施した。対面のグループ活動ではないが、学び合い的な効果がある。
- ・分からなくて困っている子どもたちと説明できる子どもたちの二派に分かれた討議からフリートークへつなぐ。(伊賀良小)
 - 言葉では分からなかった子どもたちが、相手意識を持ってより詳しい説明ができるようになった。

② 児童生徒同士が主体的に学び合う授業づくり

【国語学習検討委員会】

- “想像力”を働かせて物語を読もうとする子ども
 - ・小学校：好きな本を選んで好きなところを紹介する。
 - ・中学校：国語の時間に同じ読み物（教科書以外の短編）を読み、意見を交換する。

取組の成果

- ・単元のゴールを明確にして、それを目指した文章の読み深めをしていく。(小4年)
 - (紹介を) 作る必要感から、読むことにも力が入り、意欲が継続した。材料も積極的に集めていた。
- ・詩を使って擬音語からイメージしたものを言語化し、意見交換をしてイメージを膨らませた。(「トントン」「ピチピチ」「ギーギー」など) 自分なりの音を創造して詩を作った。(小2年)
 - 日記などに擬音を使うようになった。絵でも表すことができた。(低位生)

- ・「高瀬舟」を使っのディベート (中3年)
 - 普段意見が言えない生徒も議論に加わり、相手を納得させようとする事で読みが深まっていた。ディベートを楽しんでいた生徒が多かった。

【算数・数学学習検討委員会】

- つまづきやすい計算技能や考え方を確実に習得する子ども
 - ・分数の・分数の乗法の計算技能に「ななめ約分」という名前をつけ、小中の授業で使っていく。
 - ・移行措置により中学校から小学校へ移る内容の授業案や家庭学習の例などを小中で共有する。

取組の成果

●分数の乗法の計算技能「ナナメ約分」の活用

単に技能習得のみを目指すのではなく、割引の計算の問題を解く場面で技能の便利さを実感できるようにした。

授業は小学6年生対象に中学校体験授業として実施し、小中職員で指導案やワークシートを共有した。また、中学校でも、文字式の計算や方程式の分野で分数が出てきたときに生徒に紹介している。

【授業を受けた小学生から】

- ・割合を分数に直してナナメ約分をすると、とても素早く解けた。
- ・(割合の計算を) いつもみたいに丁寧に小数でやるんじゃなくて、分数でやるととても楽にできることが分かった。ナナメ約分で他の問題も解けるか、また自分でも探してみたい。小学校でも使いたい。

【小学校職員から】

- ・割合の本来の意味理解では小数を用いるが、計算だけ見れば分数の方が使い勝手が良い。特に理解に時間を必要とする生徒にとってはとても助けになる。
- ・分数の乗法は小数よりも将来的によく使うことになる。例えば高校へ行って物理を学ぶときなど、単位演算ができると理解がより深まるように、分数の方が使い勝手が良い。この視点からも、分数の計算技能を高められるのはありがたい。

●移行措置（代表値）の授業案共有

新学習指導要領下で中学校から小学校へ移った内容の授業案を小中で共有した。新しい分野の学ぶ意味や授業のポイントなど、中学校が今まで行ってきたノウハウや指導案のほかに、「なぜ中央値は必要か」といった生徒からよく出る質問とその答えなども共有し、数学を専門としない職員でも指導に抵抗がないようにした。小学校職員から「単元の導入として扱うことで、代表値を学ぶ意欲付けになるので良い。」という声があった。

【英語活動・英語学習検討委員会】

□主体的に学び合い、自ら英語でコミュニケーションを図ろうとする子ども

- ・スモールトークの充実を図る。

短時間でも継続的にやっていく。

基本的な表現の定着を目指す。

「話したい」「聞きたい」という気持ちを引き出すトピックの工夫を行っていく。

- ・場面設定の充実

児童・生徒が意欲的にコミュニケーション活動に取り組むための場面設定を行っていく。

取組の成果

●スモールトークの充実（旭ヶ丘中学校）（人間関係づくりに重なる）

Small Talk に取り組み始めた1学期の初めのうちは、ペアで会話が1分間ももたず、時間をやり過ぎる生徒の姿が目立った。また、すぐに会話が終わってしまっていた。

記録 3学年 5月 Topic: Weekend

A: What will you do this weekend?

B: I will go shopping with my family. How about you?

A: I have to study math.

B:

そこで、Small Talk を2～3時間に1回程度行い、教師のまとまった話を聞いたり、ペアで1分間ほど自分の考えや気持ちを伝え合ったりすることを継続してきた。活動を重ねることにより、会話が続くようになってきている。

記録 3 学年 10 月 Topic: Favorite Hamburger

C: I like cheese burgers. What kind of hamburgers do you like the best?

D: I like *teriyaki-chicken* burger the best.

C: Oh, sounds good. What do you usually buy in the hamburger shop?

D: I usually buy *teriyaki-chicken* burger, *chicken-nugget*, fried-potato and orange juice.

C: What sauce do you like for *chicken-nugget*?

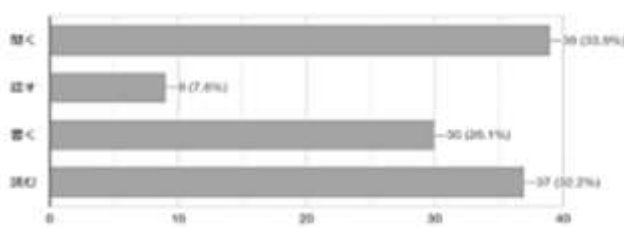
D: I like mustard. How about you?

C: Me, too.

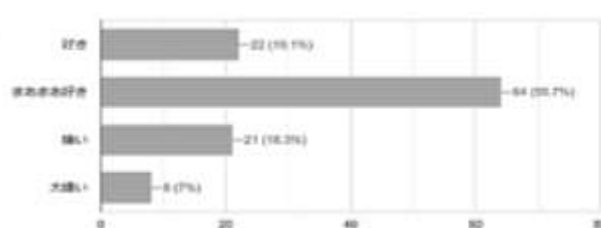
このように、好きなハンバーガーの話題だけでなく、さらに時間いっぱい話題を広げるような様子も見られるようになってきた。また、相槌を打つなど、話を続けるための工夫をしている。

【アンケート結果より (生徒対象：115 名) (10 月 5 日実施)】

「話す」ことは得意ではないと感じている生徒が多い一方で、「話す」ことは楽しいと感じている生徒も多い。生徒たちは、「自分自身のことを話せるから楽しい」「あまり普段聞けないことを友達に質問できる」「友達の事を色々知れるのが楽しい」等など、クラスメイトと本当の情報のやり取りができる楽しさや嬉しさが伺える。また、「英語を楽しみながら活用することができる」「英語に対しての自信につながる」等など、英語で「話す」ことに対する意欲や自信に繋がっている。



どの英語の分野が得意ですか？



Small Talk は好きですか？

●場面設定の充実 (伊賀良小学校・山本小学校の取組)

コロナ禍の現状を反映させた Our Goal の設定

“ いつかは行きたい！世界の国の「すてき」を、ガイドさんになったつもりで伝えよう ”

- ・各国の魅力を知り、「この国がいい」という気持ちを持ってやりとりができる工夫 Ex. Starting Out の視覚教材の活用 (右図)

昨年度に扱った単元をいかしてさらに発展

昨年度、既に世界の国々について触れている児童たち (We Can! 1 Unit 6 I want to go to Italy.)

- ・Our Goal に基づき、対象を「世界の国」のみならず「都道府県」も含めるように拡大



【S児】世界の国々の様子を動画で見たときは「自由の女神の中に入りたい」とアメリカに興味を持っていた。最終的に「カキが好きなので行って食べてみたい。お好み焼きも食べてみたい」と広島を選び、そこで食べられるものやお土産で買えるものなどをクラスメイトに紹介することができた。

【M児】本単元が始まった頃から「韓国に行きたい」という気持ちが強かった。学習したことや調べたことをふまえて韓国で食べられるものや見所を紹介していく中で、「話すというより教えるということをした」と、自分の行きたい国について自信を持って伝えている様子がうかがえた。

※その他、言語活動を通して「他の人が選んだ所も行ってみよう」という意見を持つ児童もみられた。

(2) 人間関係づくり

適切な学びの場でいきいきと自分の力を発揮して伸びるための幼保小中連携や家庭支援

【特別支援教育検討委員会】

□特別支援学級への入級が考えられる児童対象の授業参観、体験、保護者懇談等の実施
・様々な形で行うことで小学校から中学校へのスムーズな進学や支援につながっている。

□ICT機器の活用(個に応じた指導とも関わって)

・生活単元学習、自立活動、教科学習等の中での利用を進め、効果や課題を蓄積する。

【教育支援指導主事による小中のつなぎ】

□不登校傾向の児童生徒の過去の様子や家庭の状況などが指導に役立っている。

□「3校をつなぐ通信」を発行していただいております、廊下に掲示してある通信をにこやかに
見ている子どもたちの姿がある。

取組の成果

1人1台のパソコンが導入され生徒1人1人のペースに合った、最適な学びが追究でき始めている。

●単元「飯田を知ろう」 水引を使って淡路結びを作って行く事例(知障学級)

- 1 淡路結びの手順を検索。各自がそれぞれ違った気に入ったページを決めて見ていた。
- 2 うまくできていないところを何回も見ていた。
- 3 早く終わった生徒が他の生徒にアドバイスをしていた。
- 4 何とか全員が完成をした。

パソコンにより学習に個別・最適化が図られている。また、早く終わった生徒が周りの生徒へ声がけしたり、部分的に手伝ったりするなど、生徒同士の関係をつなぐこともできた。さらに、教師に依存しすぎず自力で頑張ることも経験させることができた。



(3) 9年間の教育課程【(1)授業改善に含む】

(4) 組織の構築

地域連携の組織づくり

□3校合同研修会への保育園職員の参加や校園長会等の実施

取組の成果

- ・今年度は感染予防の観点から研修会への保育園職員の参加は中止したが、校園長会是一部実施した。
- ・3校合同研修会の実施【11月2日(月)】
小学校2校の職員が中学校の授業参観をして、その後各部会・委員会での会合を設定した。中学校の空気を肌で感じ、参観して良かったという声を多数いただいた。参観の視点を明確にして実施したことにより、その後の部会での「連携」への意識が明確になった。
部会の1つである推進協議会では、公民館・町づくり関係者・民生児童委員・小中PTA会長等の様々な立場の方がメンバーとなっている。生徒の姿を通して語っていただき、学校への要望などを聞くことができた。また地域としての課題も共有することができた。
- ・新入生中学体験学習【10月29日(木)】
従来は中学生の授業を見学する形であったが、6年生児童に中学校の授業(9講座)を体験する形に変更した。中学校の雰囲気を実感するという点で好評であった。今年は出前授業を行うことができなかったこともふまえ、体験学習のあり方について今後さらに検討の余地があ

と思われる。

- ・小中学校の校長・教頭・支援指導主事による情報交換会の開催
今まで実施していなかったが、毎月1回程度参集して、小中連携に加えて諸々の情報交換を行うことにした。3校での現状認識ができ、方向性を共通理解することができている。

4 課題

(1) 授業改善・(3)9年間の教育課程

①学習スタイルについて

- ・様々に工夫された手立てやICTを使った実践が行われているが、子どもの目線や立場に立って「どんな力をつけるか」を考えた上で、手立てを考えたり、ツールを利用したりする事が大切である。
- ・大人の教師からの視点ではなく、子どもにとっての学習環境を整えるとは、学びやすい環境とはといった観点からの検討が必要である。
- ・成果の捉え（数字に表現するのが困難な場合が多い）の検討と新指導要領に伴う「旭ヶ丘中学校区学習スタイル」改訂を推進する。

②コロナ禍の影響

- ・コロナ禍での予習的家庭学習は、まだまだ子どもたちの身についていない様子が見られた。パソコンが導入されたので、今後家庭学習で予習的な学びをするような課題の出し方も工夫していきたい。
- ・子どもたちの人間関係づくりが充分とは言えず、授業においても子どもたちの関わりが弱い面がある。一方、距離が離れていることもあり、1人になって考えることが身についてきているという成長も見られるので、1人になる場面、関わり合う場面を授業の中でミックスしながら学びを深めていきたい。

③タブレットPCの活用

- ・目的意識がないまま使う恐れもあり、自分で見つけたいものを探していける力、自分の時間をコントロールする力をどうつけるかが課題である。→生徒同士が考える機会をとっていく。

④主体的に学び合う授業作り

- ・（英語）活動計画を立てる段階で、今年度は2つの視点（「スモールトークの充実」「場面設定の充実」）を設定したが、結果的に小学校と中学校で活動の狙いが二分化してしまった。来年度は共通の取り組みとして一貫性を持たせるために活動の狙いを1つに絞っていきたい。

(2) 人間関係づくり

①中学校区3校とも「挨拶」は課題として挙げられる。自分から主体的に取り組めるための連携を考えたい。

②人間関係では、小学校でのトラブルを中学校でも引きずってしまう可能性があるため、予防策を考えていく。また、児童生徒が相談しやすい環境づくりも小中でそろえて整えていく必要がある。

(4) 組織の構築

①6年生に向けた小中連携

従来の「出前授業」は、ICT 機器活用などの工夫をし、特定の教科や領域に関係なく検討したい。

②小中の職員がそれぞれ授業を公開し合い、お互いに児童生徒の参観をすることができることが意義深いと考えるので、それが可能になるような日程調整や計画をしていきたい。

1 めざす子ども像

郷土の愛着と誇りをもち、自己実現を図る鼎の子

2 取組の重点

持続性のある活動を積み重ね、児童生徒一人ひとりに応じた「可能性の芽」の伸長を図る。

(1) 学力の育成

(2) よりこまやかな児童生徒支援

(3) 小中連携推進委員会による具体的な教育活動の推進

小中連携・一貫推進委員会における7つの分科会での小・中で一貫した教育活動について検討および推進する。

(4) 地域との連携

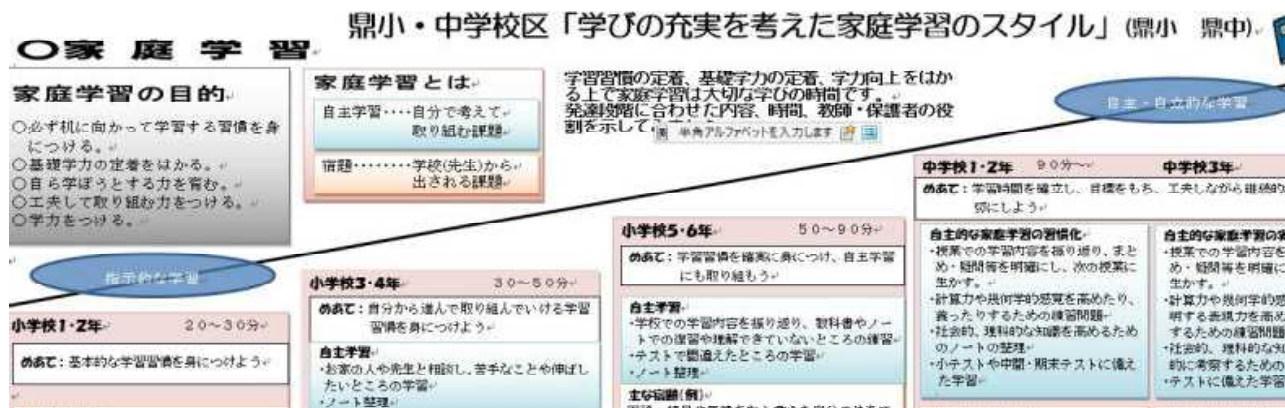
小中が1つの「かなえコミュニティスクール」を形作っている特長を活かし、学校運営協議会を窓口にして、地域の意見を大切にしながら児童生徒の育ちの可能性を探る。

3 取組内容と成果

(1) 授業改善

① 学力向上・家庭学習

昨年度に作成をすすめた鼎地区「学習スタイル・家庭学習の手引き」、小・中学校の各学年・各教科のそれぞれで再度見直しを行った。9月下旬に、全家庭に配布し共通理解を得るとともに、活用をスタートさせた。



小中の全家庭に配布した「学習スタイル」

- ・家庭での充実した自主学習に向けて取り組みを始めた。

【小学校】

- ・自主学習ノートを定期的に見合う時間をつくり、良い所を友だちからコメントをもらえるシステムによって、自分で自主学習の内容を考えることが難しい生徒へのサポートになっている。
- ・自主学習を行った時間の記録と、振り返り（頑張ったこと、改善点）を記入することで、質の高い学習ができるようになってきた。

【中学校】

- ・提出ノートの内容に個人差がある。自主学習が難しい生徒には、教科担任が内容を具体的に指示するなどサポートが必要である。

自主学習についての具体的な取り組み方を日常的に指導している。
以下は、12月に発行され6年生のある学級の通信である。

その次の日、Aさんが計算ドリルを自習ノートにやってきました。円の面積を求める問題です。何が良くてみんなに紹介しているかというところ、ノートまわりに書いてある計算した跡です。「小数の計算を丁寧にがんばったんだろうなあ」って事が伝わってきます。

下の写真は、Bさんの自習ノートです。いつもめっちゃくちゃ丁寧にノートをまとめてくるBさんですが、きっとAさんのように「たくさん問題を解く!」というよりは、「習った漢字を復習して整理する!」ようなイメージでやっているのだと思います。

どちらも、「目的」が感じられる自習ノートで良いなあと思いました。いろんな目的があってもいいと思いますが、「ノートを埋めるため」という目的だけはやめてくださいね。自分のために、中学に向けて、充実した自習ノートにしましょう。

自主学習以外にも、自立した学習者の育成を目指してICTも活用している。

② ICT活用 ―キュビナの活用―

キュビナとは、算数・数学学習用AI型タブレット教材である。一人ひとりの学習中の操作ログや計算過程、回答データを分析し、つまづく原因を特定し、その子が解くべき問題へと自動的に誘導し効果的な学習ができる。

小学校では、11月から全校でキュビナ(算数)を使った学習を始めている。

キュビナを使ってみての子どもの感想

【4年生】

- ふく習があって安心。
- 計算などをしたい時、メモするところがあるのでいいと思いました。
- 算数が楽しいと思うようになりました！苦手だったけどがんばっています！
- 答えをかくときに少しだけ反のうするのがおそいのももう少し早くできるようにしてほしい。
- エラーが多いこと・・・文字(数字)をあまりんにきしないこと・・・

【6年生】

- 間違えたら理解していないところまで戻ってすごいと思った。
- 問題がわからないとき、解説を押せばわかりやすく解説してくれた。
- 道具(分度器など)が使いにくい。
- セーブができないから、いちいちやり直さなきゃいけないのを改良してほしい。
- x が $\times$ (かける)に変換されて式を書くのが大変だった。

中学校もキュビナを使う準備を進めている。先に導入した小学校から助言をもらいながら効果的な導入、活用をしていきたいと考えている。

③ 体力向上

年度当初は、ネット型競技と6年生の体育理論の出前授業を予定していたが、コロナ禍の影響でできなかった。授業内容の情報交換を定期的に行っており、昨年度の3学期に中学校で行ったオリンピック、パラリンピックの授業を参考にして、本年度、小学校でオリンピック学習を行った。

パラリンピック授業の実践 (6年4組 11月)

【授業の概要】

パラリンピックの歴史や意図を確認してから、シッティングバレーを体験してみよう。
(ビデオ視聴後に体験をした)

【授業後の児童の感想】

- ・思ったほど簡単ではないことが分かった。
- ・オリンピックとは別のものと思っていたけど、好きな選手がいると興味を持ってみる事ができるようになると思った。

④ 外国語活動・英語

会話力を育てるために、小学校で行っている授業開始時のSmall Talkを、中学校でも授業の中で、できるだけ行っていけるようにした。

< 鼎小のsmall talkの例 >

- ・電子黒板に車の写真を写し、ALTの先生とのやりとりから始める。
- JT : I want this car.
ALT: Oh, really?
JT : What do you want?
ALT: I want a bike to come to school.

…というように会話をふくらし、何人かの児童にWhat do you want? を聞く。
さらにペアでお互いにほしいものを聞き合う活動に発展させた。

< 鼎中のsmall talkの例 >

- ・ALTの先生と行きたい場所について
- ALT: Where do you want to visit?
JT : I want to visit Australia.
ALT: Why?
JT : I have been to Australia once.
I stayed with my host family for 10days.
と言って、ホストマザーと撮った写真を見せる。
生徒は興味深々で写真を見ている。
JT : I want to see her again.
JT : How about you?
ALT: I want to ~.
JT: Oh, really? Why?
…そのあと生徒2～3人に聞いてから、ペアで聞き合ってもらう。(1分)
ペアを替えてもう1分会話を続ける。



ペアでsmall talkする3年生

【中学校での成果】

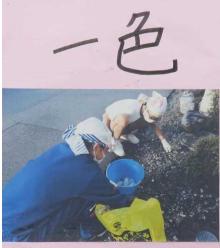
- ・英語でのスピーキングに慣れてきた。そのため、英語での問いに対しての英語での解答が非常に速くなってきた。ペアでのsmall talkも積極的になってきた。
- ・スピーキングテストでは、途切れずに会話し続けようとする姿勢が見えてきた。

(2) 人間関係づくり

① 児童会と校友会の交流

○鼎小学校にも中学校にも青少年赤十字委員会(JRC)がある。小中のJRC委員会が合同で地域でのボランティア活動や交流を計画している。

7月は、コロナ禍のため中学校のみの地域ボランティア活動となったが、10月12日には小学校と中学校の合同での地域ボランティアを行った。ボランティアは希望参加で、それぞれの地区の公民館清掃、県図書館の蔵書整理、地域の一人暮らしのお年寄りへの絵手紙作成などから自分で選んだ活動を行った。



中学校では、それぞれの活動のまとめを掲示して、共有した。

【感想】

- ・中学生がすごいと思った。小学生と協力してできたのでよかった。
- ・いろいろな人とボランティアを通して交流することができた。

【公民館の方から】

一生けん命頑張ってくれて、ありがとうございました。

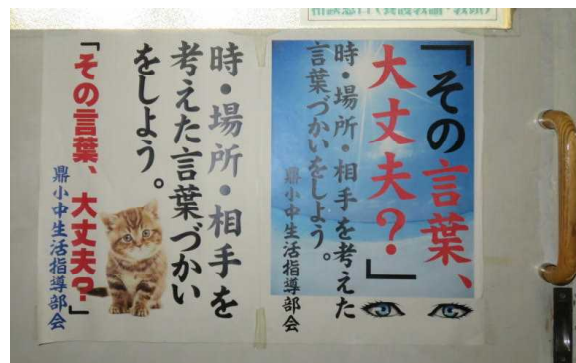
○児童会と校友会役員が街頭に立つて行う小中合同のあいさつ運動を、月初めに行っている。コロナ禍のために、小中合同でのあいさつ運動は少なくなったが、それぞれのあいさつ運動は、小学校、中学校の共通の通学路で行っており、小学生と中学生が朝のあいさつを交わす場になっている。

私たち役員は1年間、あいさつ運動を行ってきました。今年はコロナウイルスの関係でハイタッチでのあいさつができませんでした。マスクをつけているので、自分でもみんなに伝わるように、大きな声で言ったり意識しました。通る小学生、中学生が自分のあいさつを返してくれてとてもうれしかったです。あいさつ運動を通して、あいさつは、する自分も相手も気持ちよくなれるもので、大切なんだと気づくことができました。ハイタッチができなくて、言葉で言うだけでも、きちんとした意味があると思います。あいさつ運動をやって良かったなと思います。

(中学校3年生の生活記録より)



- ② 昨年度から、「県小中の児童・生徒は言葉遣いが良くない」ということが共通の課題として挙がっていた。そこで、昨年度は右の写真にあるポスターを校舎の目立つところには掲示し、小中の児童・生徒・教職員の全員が言葉遣いを意識してきた。言葉遣いを全員で意識しての2年目、「生徒指導・生活指導」分科会は、「県小中学校の児童・生徒の言葉遣いがかなり良くなった」と振り返った。共通した課題を継続的に意識し続けてきたことが、その要因ではないかと分析している。
- 本年度は、授業での話し方「発言は最後の“です”“ます”まではっきりと話す」「友だちの名前は“さん”をつけて呼ぶ」など「伝える」ことの基本の指導を小中が一緒に行っている。



(3) 9年間の教育課程

① 小学校特別支援学級の中学校訪問

11月2日に小学校特別支援学級の5、6年生の児童が中学校を訪問し、中学校の特別支援学級の授業を参観したり、交流したりする活動を行った。

小学生、特に特別支援学級の児童にとって「中学校はどんなところだろう」という気持ちは強く、事前に児童にとった「おしえて先輩。中学校ってどんなところ？」というアンケートに中学生が答える形で交流会を行った。小学生からの質問は「中学校生活は楽しいですか?」「中学校の給食はおいしいですか?」といった大きな質問から「制服の下には、何を着るんですか?」「中学校は、おりがみとかできますか?」といった細かな質問まで、丁寧に答えている様子が見られた。

- ・今日は中学校に行ってきました。学校はとても広かったです。 たっきゅうがとてもたのしかったです。
- ・ちゅうがっこうにいったきました。すごくて一日でまいごに なりそうです。ぶかつのなかでたっきゅうになりたいです。

(参加した小学生の感想)



小学生が中学校へ訪問しての交流は、2月の下旬にも予定している。2月の交流会は、実際に授業の体験をすることで、中学校生活の見通しをもち、安心して中学校へ進学してもらうことを目的としている。そのため、中学生と一緒に料理をするといった自立活動や、1年生と一緒に勉強をしてみる教科学習を予定している。

② キャリアパスポートの作成

- ・小中統一した形式でのキャリア・パスポートが提案された。
- ・裏表紙には、キャリアパスポートのねらいと使い方
- ・年度当初に、A：こんな〇年生に、B：学習面、C：生活面、D：家庭・地域、E：習い事、趣味、(部活動)、F：みんなのために取り組むこと(学級、行事、児童会・校友会)、〇自分の未来像 のそれぞれの項目について1年間の目標を立て、年度末に振り返るようにした。
- ・統一したファイリングを行い、小学校から中学校へのキャリア・パスポートの引継ぎについても相談を行った。

(4) 組織の構築

○ 第1回小中連携・一貫推進委員会(分科会リーダー会) 6月3日(水) 鼎小学校

*小中全職員が関わって推進委員会を行う予定であったが、本年度は新型コロナウイルス感染症対策として、小中の分科会のリーダーのみで話し合った。

〈リーダー会の内容〉

- ・小中のリーダーが、分科会に分かれて本年度の活動について討議し計画を立てた。
- ・リーダーの全体会で、分科会ごとの活動計画を発表し合い、本年度の小中連携活動について、見通しを持った。

○ 第2回小中連携・一貫推進委員会 11月9日(月) 鼎中学校

〈内容〉

- ・小中の全職員が、分科会に別れて10月までの取り組みの様子を振り返り、今後の具体的な取り組み内容や来年度に向けたの申し送り事項を討議した。
- ・全体会で、それぞれの分科会のこれまでの取り組みの成果と課題、本年度のこれからの取り組みの予定が共有された。



○ かなえコミュニティスクール

中学校区に1小学校という特徴を持つ鼎小・中学校では、共通のコミュニティスクールがある。小学校、中学校、小学校PTA、中学校PTA、町づくり委員会、公民館、地域が共通の目指す子ども像を持ち、共通のねらいを持って活動を行っている。

- ・本年度は、公民館が主催して小学生の体験講座「ずん ずん ず〜ん隊」が何回か開催された。小学生は、親子で農業や農産物の加工の体験学習に参加し、中学生は、その運営のお手伝いのボランティアとして参加した。また、この体験講座には鼎地区の高校生も参加している。

4 課題

(1) 授業改善

- ・タブレットPCの活用の仕方を検討していく。タブレットPCを有効に活用して、学力向上につなげられるように検討していく。
- ・小学校、中学校の授業の見合い交流を考えていく。
- ・自主学習の内容の向上に向けて、取り組んでいく。

(2) 人間関係づくり

- ・児童会と校友会の交流を子どもたちが主体となって行えるようにする。そのために、小中の新役員同士が話し合う場を本年度中に設ける。

(3) 9年間の教育課程

- ・特に、配慮を要する子の（幼保）小中（高）の情報の引継ぎを確実に行う。また、そのために具体的方法の見返しと検討を行っていく。
- ・子どもたちにとって意味のあるキャリアパスポートの活用を検討していく。

1 めざす子ども像

意気と希望と人の和で未来を拓く子

「意気」 …自ら考え、行動する子ども

「希望」 …学んだふるさとを愛し、未来を拓く子ども

「人の和」 …ちがいを受け入れ、共に生きる子ども

この3つの姿を中学校区とし求めていくことで、自分の未来を切り拓き、力強く歩んでいく子どもを育てていきたい。

2 取組の重点

- (1) 小中連携・一貫教育の重点を「学力向上」と「不登校支援(不登校防止)」に焦点化
 - ・子どもの主体性を大切に授業づくりについて合同研修を行い教師の授業力向上を目指す。
 - ・目指す子どもの像の実現に向けて、3校における教育課題や日々の実践の悩み等を共有し合い、教師一人ひとりが日々の実践の中でどのような取組を行うか、検討する機会を設ける。
- (2) 不登校や教室不適応の児童生徒について、中学入学後もつながりをもって支援ができるように支援の具体について共通理解を図る。
- (3) 外国語教育及び総合的な学習の時間における9ヵ年の小中一貫カリキュラム案を実践し蓄積する。
小中とつながりをもった家庭学習(自主学習)の充実を図るあり方を探る。
- (4) ・定期的な小中連携一貫教育推進委員会を持ち、事業の推進状況を課題を確認する。各校管理職が小委員会の相談役としてメンバーに加わり、推進していく。
・公民館と協力して地域・保護者へのさらなる啓発。「めざす姿」に向けた中学校区全体としての共通理解と協力をいっそう得られるように意識の醸成を図る。

3 取組内容と成果

(1) 授業改善

① 英語科における小中連携の取組**事例1** 「小学校のまとめに、自己紹介を完成させて、中学校で自己紹介をしよう」

小学校の外国語活動のまとめとして、また、小学校の「話す」「聞く」活動をさらに中学校の「書く」活動へつなげるために、中学校から「自己紹介のアイデア」を出し、それを使って卒業前に自己紹介を書いてもらうようお願いした。その自己紹介文は中学校で預かり、最初の英語の授業を使って自己紹介を行うことを考え実践した。自分の名前、好きなこと、得意なことについては小学校で学習したことを活用して例文を見ながら書き、中学校でがんばりたいことについては、「自己紹介のアイデア」の表現と例文を用いて書いた。しかし、コロナ禍による休校により、自己紹介が作成途中のままで卒業を迎えてしまった児童もいた。

(ア) 休校中の課題と分散登校中の授業の中で

中学入学後、コロナ禍のため、クラス全体でこの自己紹介を用いて授業することが難しい状況になったこと、自己紹介が作成途中のままで入学した生徒もいることから、休校中の課題として、「自己紹介のアイデア」を見ながら、自己紹介を完成させることを課題とした。

分散登校中、課題の自己紹介を確認するために、教師と生徒とのやり取りの中で、一人ずつ自己紹介を行った。コロナ禍の制約があったため、生徒同士でやり取りをすることはできなかったが、小学校からの積み重ねもあり、発音なども正確に、自信を持って自己紹介をする姿が見られた。しかし、これだけで小中連携の自己紹介を終わりにしてしまうのは残念過ぎると思い、教科書NEW CROWN1の1学期のまとめとしての単元、「Project 1 自己紹介をしよう」で活用することにした。

(イ) Project 1 自己紹介をしよう

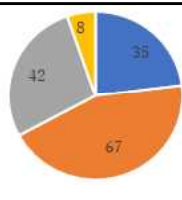
小学校で学習してきた「話す」「聞く」を活かしながら、中学校で新たに文法の成り立ちや、英語を「読む」「書く」活動に取り組み、知識を広めている生徒たちが、小学校卒業時または中学入学当初の自分の自己紹介を見返して、さらに内容を「広めたり」「深めたり」して自己紹介を書き、発表する授業を行った。まず、今までの学習の中で行ってきた自己紹介の内容と、教科書のLessonを通して学習したことを確認した。今までの自己紹介に、さらに情報を付け加えたり、自分の大切なものや人についても紹介したりすることで、相手に自分のことをよりくわしく伝えることができ、知ってもらうことができる自己紹介を書いて、発表を行った。

A生の自己紹介のひろがりや深まり (内容のひろがり)

I want to make some friends in junior high school. という願いを持ち、中学校へ入学してきたA生。後半では、その願いが叶い、自分の友だちについて紹介する記述が見られた。

B生の自己紹介のひろがりや深まり (内容の深まり)

Lesson 4 で学習した表現を参考にしながら、I'm good at table tennis. について、ボールを紹介したり、いつ、どこでプレーしたりしているかの話題を付け加えて、書くことができた。



授業後の子どもの声(アンケートより)

「小学校の外国語活動のまとめとして自己紹介を「書く」ことをしました。(コロナ禍により、休校中の課題にもなりました)その自己紹介は、中学校での授業に役に立ちましたか？

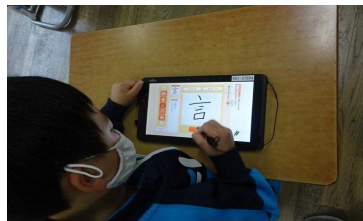
- ・自分のことを簡単に教えてあげることができたからよかった。
- ・自分の名前、好きなことの紹介でのコミュニケーションが役に立った。
- ・小学校で自己紹介文は書けなかったけど、中学校になる前に、クラスで自己紹介したことがしっかり役に立った。
- ・自己紹介でどのようなことを言えばいいかが分かっていたのでやりやすかった。

2つの小学校から1つの中学校へ進学することもたちにとって、小学校のうちに自己紹介文を書いておいたことで、安心して中学校の英語に取り組めたと思われる。新しい友だち作り(コミュニケーション)の面でも大いに効果を上げたと思われる。また、中学校での新しい単元展開に繋がっていったことも成果と言える。今後も「飯田市外国語教育 小中連携カリキュラム」を参考に取り組んでいきたい。

② 各校で家庭学習におけるICT機器活用の可能性を探り共有し、学力向上への活用方法を探る。

事例2 各校の取組事例

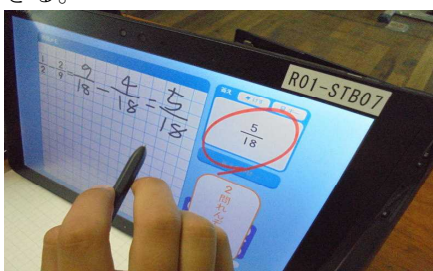
家庭学習におけるICTの活用の可能性		
座光寺小	上郷小	高陵中
プログラミングの学習 ドリル学習 家庭での学習を補助するサイトの紹介 (休校期間中に利用した家庭複数あり)	休校期間中における取り組み ・教科書にあるQRコードを、おたよりで知らせる。 →算数は、予習型学習に活用 →国語・道徳は、範読に活用 今後の可能性 ・Zoom等を活用した双方向での学習 今後に向けてあがった意見 ・以前は「eライブラリ」があり、ドリル学習に活用できたが今はない。 ・「Sky menu」が導入されておらず、一斉指導に不便	・テスト前のおさらいをする動画を配信。画面録画を中心に。 ・普段の授業でもzoomのチャットのつぶやきOKにする。 ・制作の様子を動画で説明(美術) ・関数の水が同じ量ずつ増えるのを映像と表を対応させて視覚で確認(数学) ・映像を見て、それを見ながら記入するワークシートの活用(社会) ・各自の体づくり運動の様子(腕立て、縄跳び、リフティング等)を動画で撮影し、学校へ送信する。(保体)
ドリル学習実施済み 教科書のQRコードを読み取り、一人学習(英語で実施済み) 学習のポイントを教師側から一方通行で映像とともに掲示 家庭での学習を補助するサイトの紹介 (休校期間中に利用した家庭複数あり)		



7/16 第1回学力向上(家庭学習)委員会において、今後のコロナ第二波やICT教育の推進へ向け、授業とリンクした家庭学習の推進や個人用TBの活用について話し合われた。現在各学校に配置されている児童生徒用TBやICT機器を実際に使用しながら実践や工夫を紹介し合うことが確認された。

座光寺小学校では現在ある児童用TBを使い、各学年で国語と算数のドリル学習を行い、漢字や計算の基礎学力定着と学力向上に取り組んでいる。

小2新出漢字の学習では、書き順や読み方、例文などが提示され、子どもひとりでも集中して学ぶ姿が見られる。小5算数の計算練習では、自動的に採点してくれるので間違いに気づきやすく、自分のスピードで自分のレベルに合った学習ができる。また、間違いの多い問題は、電子黒板を使い全員で確認することもできる。



子どもの声

- ・TBを使っの勉強は、間違ったところをやさしく解説してくれるところが良い。 ・やったことが保存されるところがいい。
- ・機械が答え合わせや読み上げをしてくれるので、楽しい。漢字、計算、写真を撮るなど、これからいろいろやりたい。
- ・問題を間違えても、やり直しができたり正解を教えてくれるからいい。いろいろなやり方で問題を解いて行けて楽しい。
- ・算数は、自分に合った問題ができるし、答え合わせをしてくれるのでとてもいい。漢字では、間違った漢字をしっかりといてねいに教えてくれるから分かりやすい。
- ・家に持って帰ることができれば、お母さんが忙しくて○つけしてもらったり教えてもらえなくても、答えが出るので一人でもできる気がする。
- ・時間設定や問題の数を自分で決められるのでやりやすい。

12月からは、一人1台のTBで、家庭に持ち帰り家庭学習に使えるような手応えを感じた。他校ともこの実践を共有していく。

(2) 人間関係づくり

- ① 不登校、教室不適應の子どもについての状況理解と対応策策定
 - ・重点：小5、6年 中1、2年
 - ・学年会、ケース会議等への教育支援主事の参加
- ② 子ども理解について学年・学級PTAを活用した研修
 - ・不適應未然防止、不適應前兆期の理解と対応
 - ・教育支援主事の活躍と支援
- ③ 学びの場とICTの活用
 - ・学校における学習の場（相談室、OR等）
 - ・家庭及び学校でのICTを活用した学習
 - ・学校外施設の活用（図書館、公民館等）
 - ・地域の力を借りた学びの場の設定

【事例3】学校外公共施設を利用しながら登校再開へつながった中学C生の事例

昨年度1月に上郷図書館で個別学習を開始

5月 分散登校時（上郷図書館学習室閉鎖）→無人の教室へ登校。週1時間程度。私服登校。

6月 相談室登校が可能になる。→相談室（金曜日） 図書館（水曜日）。制服登校になる。

8月 本人より懇談会にて登校日数増の要望が出される。（学校へ月・金、図書館へ水）

9月中旬 学校への登校が週5日になる。図書館活用を終える。現在欠席なく登校。

【事例4】教室に入れない児童のため校内に中間教室を設け地域教育ボランティアをお願いした小学校の事例

教室には入れない児童のために、相談室・図工室を校内中間教室に位置づけた。運営支援のため、教育ボランティアを2名の方にお願ひできた。図工室では支援主事が学習活動を、相談室ではボランティアが折り紙や自主学習を見守り、対話等を行ってくれた。その結果、児童の安心できる居場所が位置づき、関係児童の安定した登校が継続している。

④ 配慮が必要な児童の引継ぎ … 中学入学後の生活について

(3) 9年間の教育課程

- ※ 昨年度までに外国語教育、及び総合的な学習の時間における9ヵ年の小中一貫カリキュラム案が作成できたため、本年度は多くの職員で実践を行い蓄積していく。

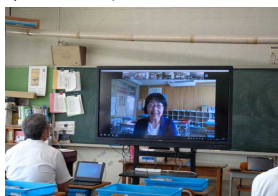
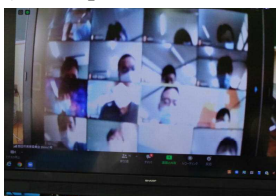
(4) 組織の構築

- ① コロナ禍で行える小中連携の方法を探る。（中学校文化祭見学、部活見学、体験入学 など）
- ② ICT機器の利用状況を共有し、取り入れられる活動を取り入れる。
- ③ 3校職員合同のICT教育に役立つ理解講習会を実施。
- ④ 飯田コミュニティSCとして、コロナ禍の教育活動を保証するため、地域の力を借りる。

事例5 3校職員合同のICT教育に役立つ理解講習会を実施とコロナ禍で行った小中連携の事例

まずは教師が知ることから

夏休み中に三校合同職員研修を開催した。「児童・生徒ひとり1台端末時代に向けたはじめの一步」として南信教育事務所指導主事を講師に、2学期中に子ども一人1台のTBが配られる前に、クラウドサービスを利用する上で必須となる「アカウント」についての理解を深め、オンライン会議アプリ「ZOOM」を用いてオンライン会議を体験することを通して、



会議の開き方や参加の仕方を理解し、今後生徒が、ひとり1台に端末が貸与されたときにどのような活用方法があるかのアイディアを出し合うことをねらいとした。まずは何より体験が大事と考え、研修そのものをZOOMで行った。

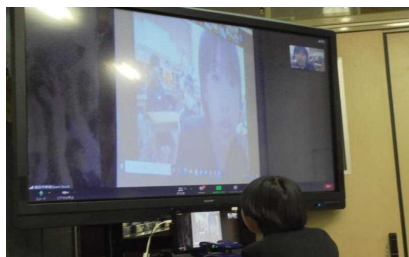


研修参加者(職員)の感想

- ・ICTを用いた授業はまだまだ不慣れで戸惑ってしまうこともあるが、ZOOMなどを上手く活用すると授業の幅が広がると感じた。いろいろと考え、挑戦してみたいと思った。
- ・機器を使っでの学習は、まず自分(教師)が使いこなせるようになることが大変だと感じる。研修を積む必要性が大きいと思った。
- ・家庭で使用する際に、子どもだけだとトラブルに対応できないので、親の協力が必要だと感じた。
- ・ICTの活用は授業に幅が出て、子どもたちもわかりやすく学習できると思うが、トラブルが起きたときに一人ですぐに対応できるのが不安。ICT支援員がいてくれると心強い。
- ・活用していきたいが、接続にかなりの手間と時間を要し、トラブルも起きる。実際子ども相手に授業が始まると、全ての先生、全ての子どもがスムーズに使いこなせるかが不安。

コロナ禍だから6年生が中学校文化祭を見学できない。では、ZOOMで繋いで見学しよう

例年なら6年生が中学校の文化祭を見学に行き、雰囲気を感じたり中学校生活への憧れを抱いたりする良い機会となっているが、今年はコロナ禍で高陵中文化祭への見学が不可能になった。そこで、夏休みの合同職員研修を生かし、3校をZOOMで繋いで、6年生はライブ中継で高陵祭の様子を參觀することができた。



6年生の声

- ・リモートでの参加だったけど、中学生がやっている雰囲気とかがわかって、来年参加するのが楽しみになった。中学生の人たちがどんどん意見を言っているのを見て、すごいと思った。
- ・私たちが思っている以上に中学校の文化祭はすごいことをやっているのだと分かった。
- ・今回リモートを見せてもらった、思った以上に人数が多くてびっくりした。まだ、不安はあるけど今回のの見たら楽しそうだったので、制服を着るのが楽しみになった。
- ・来年は、自分もあの会場に居て、今日見たようなことをするのか、と分かって安心したけどやっぱり緊張もする。でも楽しそうだったから、少し楽しみ。

開会式・英語劇などは一方的に參觀するだけだったが、グループ討論会には2つの小学校の代表者が感想を述べる場面も取り入れ、6年生も「自分たちも参加した。」という満足感を得ることができた。

実際に行って目の前で見学できない文化祭を、リモートによりライブで見学できたことで、6年生たちにとっては感動が伝わった。見に行けないからと写真やビデオで紹介しても、なかなかリアルな雰囲気は伝わらない。リモートで繋ぐことの良さと効果を感じた。

事例6 「友と関わりながら追求・課題解決をしていく協働的な学習」3校職員合同授業研究研修会の事例

11/11に3校の初任者の授業力向上を目指し、座光寺小6の1が「友と関わりながら追求・課題解決をしていく協働的な学習」(国語)の授業公開をおこなった。またこの授業の様子をビデオ撮影し、11/30に3校をZoomで繋いで全職員が参加する合同研究会をおこなった。

高陵中学校区小中連携・一貫教育の重点の一つとしている「学力向上」を目指し、子どもの主体性を大切にした授業作りに迫るために座光寺小が大切に考えている点を確認し合った。

- ・話し合いや表現活動を成立させる良好な人間関係(学級経営)を基盤にして「問い」のある授業を目指す。
- ・子どもの「問いや「願い」「気づき」「考え」等に基づき、子どもが主体的に追求していく学習。子どもが学ぶことの楽しさやよさを実感する学習の授業実践。
- ・話すことから始める表現力の育成



授業を通しての子どもの育ち(感想)

- ・時間はかかったけど、みんなで話し合って条件に合う遊びと工夫を考えられて良かった。
- ・遊びを一から考えたので、遊びを選んだり工夫を考えるのが大変だった。でも最後は意見を一つにまとめたので良かった。
- ・新たに改善できるところをしっかりと話せた。多数決の決め方じゃなくて、みんな賛成で決められた。
- ・しっかりと改善点も言えたとし、意見も出せたとし、まとめたので良かった。話し合いにちゃんと参加できたので良かった。

11/30 3校合同研修会は、各学校で 45 分間の授業映像を見たあと、3校職員が6チームに分かれ、チーム内で提供授業について子どもの姿を通して 20 分間意見交換を行った。その後3校の各グループを Zoom で繋ぎ、チームリーダーの発表に続き時間の許す限り懇談を行った。続いて閉会行事も各校を Zoom で繋いだまま行った。



研修会後を通して職員の声

- ・提供された授業を見て語り合うことで、3校で大切にしていかなければいけない授業の基本を見直すことができた。
- ・小学校でこんなに深い話し合いができる子どもたちだと分かった。この実態を知った上で中学校では授業を仕組み、さらに子どもたちを育てていきたい。
- ・提供授業では学習カードを使っていたが、タブレットを使った意見交換も授業に取り入れていきたい。
- ・コロナ禍でなかなか授業研究会ができなかったが、このような形でもやろうと思えばできる事が分かった。

3校の職員が一同に集まってる研修会はできない今年。その中でも小中連携しながら、友と関わりながら追求・課題解決をしていく協働的な学び(子どもの主体性を大切に授業づくり)ができる「高陵中学校区の子どもたち」を育てていこうとする研修会となった。合同研修会も、リモートの形でまずやってみたことが大きな成果となった。

4 課題

(1) (4) 授業改善・組織の構築

- ・子ども一人1台タブレットを持つ時代になり、各教室へは電子黒板が整備された。しかし教職員がICT機器を授業やリモートで使いこなすスキルや知識が追いついていない。授業や家庭学習においてICT機器を1つのツールとして用い、学力向上に結びつけるために、さらに三校で連携と情報共有しながら有効活用を図る必要がある。

(2) 人間関係づくり

- ・不登校生を学校外施設へ誘うことでハードルが下がり、徐々に学校へそして教室へと登校が再開されるようになった。また、小学校内に中間教室を位置づけたことで登校再開へつながった児童もいる。三校でこの成果を確認しながら、より一層地域の理解を深め、施設や支援ボランティアなどの地域力を生かしていく。

(3) 9年間の教育課程

- ・昨年度までに外国語教育、及び総合的な学習の時間における9ヵ年の小中一貫カリキュラム案が作成できたが、コロナによる休校や授業時数確保のため、総合的な学習の時間のカリキュラムが今年度については計画通りに推進できない面が見られた。できる範囲で実践し、蓄積していきながら、適宜カリキュラムの見直しを行い、より良いカリキュラムづくりを目指す必要がある。

令和2年度実践報告書 遠山中学校区「実践の成果と課題」

1 めざす子ども像

「郷土を愛し、社会の一員として、自立した生活ができる子ども」の育成

2 取組の重点(子どもの変容)

(1)「授業改善」に向けて

- ①「自ら課題を見つけ主体的に学ぶ子ども」の育成をめざし、授業改善と学力の向上を図る。
- ②飯田市ICT教育モデル地区として、遠隔システムや一人一台のタブレットPCの活用を行い、少人数の欠点を補い、中山間地であることを利点できるように連携を図る。

(2)「人間関係づくり」：不登校児童生徒の減少を含めた人間関係づくりに向けて

- ①学校行事や交流会、授業研究会などを通して、児童生徒および教職員間の交流を深める。
- ②「豊かな心を持ち、時と場に応じて適切な言動ができる子ども」の育成をめざして、生活指導における連携を図る。

(3)「9年間の教育課程」：めざす子ども像にむけた系統的な教育の取り組みに向けて

- ①「ふるさとを愛し、ふるさとの中で生活している自分を見つめ、ふるさとの未来と自分たちの夢を創造していける子ども」の育成をめざしたキャリア教育の連携を図る。
- ②「心も体も健康に自立した子ども」の育成をめざした運動と健康に関わる連携を図る。
- ③「自分で考動（自分で考え、判断して、行動する）できる子ども」の育成をめざし、防災と安全に関わる連携を図る。

(4)「組織の構築」：飯田コミュニティースクールの充実に向けて

- ①学校運営協議会を通じて、「めざす子ども像」の実現に向け「学校ですること」「家庭ですること」「地域ですること」の相互承認を行い、めざす子ども像の実現をはかる。
- ②中学校区で校長会、教頭会、学校運営協議会等を行い、小中連携した活動ができるようにする。

3 取組内容

(1)「授業改善」に向けた取り組み

- ②飯田市ICT教育モデル地区として遠隔システムや一人一台のタブレットPCの活用を行い、少人数の欠点を補い、中山間地であることを利点とできるように連携を図る取り組み。

・【実践事例1】新型コロナウイルスの流行に対応した臨時休校期間に、小中で取り組み情報を交換し、家庭とリモートでつなぎ、学びの継続を図る取り組みを企画・実践した事例

【和田小学校での取り組み】

4月20日「休業中のオンライン学習」についてのアンケート調査を実施。22日回収。全戸がオンラインでつながるように公民館・まちづくり委員会の協力を得る。保護者にはPTA総部



PTA総部委員会の様子

員会でZOOMの実演を行い、具体的なイメージをもってもらった。

23日に全学年の接続テストを行う。

・教科書を取り出し、集中して見ていました。とても嬉しそうでした。保育園児の妹は、保育園の先生からは送られてこないのかと羨ましかったです。（保護者より）



小学校配信の様子

文科省・県教委が提供している学習コンテンツの活用・ZOOMでの学習・YouTube動画サイトの3つを取り入れた学習を行うようにした。

家庭では保護者がついて接続を行い、学校からの配信は兄弟関係に配慮して、配信時間は全校を3つに分けた。4月27・28・30日、5月1日・8・12・14・19・21日に実施した。

23日に遠山中学校職員が、和田小学校を訪れ、接続テストの様子を見学、実施の様子や進め方について情報を持ち帰った。

【遠山中学校での取り組み】



接続方法の指導



中学校配信の様子

和田小学校と事前調査の質問項目や事前指導の資料内容などについて、情報交換した内容を参考に実施の準備を進めた。

臨時休校中の4月28・30日、5月1・7・13・15・20・22日の8日間、遠隔システムを用いて各日5教科の学習支援を行った。

和田小学校では、全戸にWi-Fi環境を整えることができ、授業を実施することができたが、遠山中学校では環境が整わなかった一部の家庭に配慮して、授業ではなく宿題の支援や質問の受付を主として、教科担任が3学年全体を相手に対応するように実施した。

実施後、実施の様子・職員の行った実施上の工夫・生徒の感想などをまとめ、3校で情報共有をして、今後に備えた。

《中学校生徒の感想》

- ・ZOOMがあるときはプリントが進んだりして、しかも楽しくできて良かったです。
- ・集中してできるので良いと思います。
- ・今までやってきてわからないところを先生に教えてもらえてすっきりしたし、わかりやすく良かったです。学年ごとやるのも、みんなで相談し合えて良かったです。

・【実践事例2】梅雨末期の集中豪雨による土砂崩落により登校できなくなった一部の生徒に対し、遠隔授業を行った事例



中学校理科の授業

7月28日（火）土砂崩落により通学路（バス）が不通になったため、2名の生徒が通学することができなかった。

4～5月の臨時休校中に、上村小学校では特認校の児童に対して、遠隔授業で対応した。その時の対応についての情報を参考に、登校できない生徒2名（2年生・3年生各1名）に対して、通常の日課で行われている授業に遠隔で参加する形態の授業を計画した。



中学校美術の授業

本校の4～5月の経験をもとに教務主任が日課を編成、教科主任を中心に各教科の指導内容の確認と資料の準備をすすめた。自宅で授業を受ける各生徒には日程や準備などについての連絡を行った。当日は、朝の学級活動の時間から下校のあいさつまでの時間、2年生・3年生の各学級の授業教室2カ所から同時に配信した。特別教室への移動は、休み時間に生徒がタブレットを持って移動した。

授業中、教師の指示についてタブレット端末の近くにいる生徒が補足の説明をして手助けしたり、休み時間にタブレットを介してクラスの生徒が日常会話を楽しむ場面が頻繁に見られた。

実施の様子についてまとめ、今後に向けて和田小学校、上村小学校と情報の共有をはかった。

《中学校生徒の感想》

- ・ZOOMで授業に参加するのはおもしろかった。
- ・初めてなので緊張したが、いつもと同じように授業を受けることができたと思う。もう1日あればもっと上手にできたと思う。

《教科担任等の感想》

- ・実際に再度臨時休校になった時、リモートで授業を行うとするなら提示の仕方や、生徒の様子への把握、評価の仕方など、教室で行う場合とはちがう技術が必要。子どもたちは、機器を使い慣れていることから、状況に対応できるようになっている。子どもたちの最も不安なことは、接続が確実にできるかという点だが、何度かやっていくうちに確実性は増すはず。

・【実践事例3】新型コロナウイルス流行に伴い、オンラインで他校との双方向のやりとりも行いながら、長野県庁の見学を実施した事例

和田小学校・上村小学校では、長野県内の小規模校がオンライン上で双方向でのやりとりをしていこうと結成した「すみっこクラブ」の仲間（飯山東小・栄小・御岳小・大滝小・北相木小・

上村小・和田小)との学習をしている。



新型コロナウイルスの影響で長野県庁見学が中止となったため、「すみっこクラブ」の仲間以外に南相木小・伊那西小も参加し、オンライン上で県庁見学を企画、実施した。

また、和田小では当日、1名の児童が欠席で

あったが、クラスの子どもたちから、「オンラインでやればいいじゃん。」との声上がり、家庭からも見学に参加することが実現した。

《小学校児童の感想》

- ・「見学に行くことができない。」と聞いてあきらめていたけれど、実際にオンラインで見ることができて良かったです。
- ・県庁の人が説明してくれたけれど、説明してもらったら、よけいに県庁へ行って、見てみたくなりました。
- ・ぼくは、県庁見学の日休んで、家でごはんをしょんぼり食べていました。その時、電話がかかってきて先生が、「オンラインで参加してもいいよ。」と言ってくださったので、見学ができて嬉しかったです。

《担任の感想》

・この県庁見学には、長野県内の9校、計64名の子どもたちが参加しました。和田小からは、Aさん、Oさんが疑問に思ったことなどを担当者の方に質問しました。他の学校からも多くの子が質問をしたことで、より深い学習とすることができました。これこそが多くの考えや意見に触れることができるという遠隔学習のメリットです。

この日はHさんが、微熱のため欠席となりましたが、体調もそこまで悪くなかったため、自宅からオンラインで参加しました。(Hさんが見学を楽しみにしていたから、オンラインで参加できないかなという子どもたちの声から実現しました) Hさんは、感想も堂々と発表していました。コロナ禍における新しい見学のスタイル、欠席時の授業参加といった点でも新たなチャレンジでしたが、手ごたえを感じる取組となりました

(2)「人間関係づくり」：不登校児童生徒の減少を含めた人間関係づくりに向けた取り組み

①学校行事や交流会、授業研究会などを通し、児童生徒および教職員間の交流を深める取り組み。

- ・【実践事例】学校行事等による交流、生徒指導関係の事例検討会は本年度は中止

(3)「9年間の教育課程」：めざす子ども像にむけた系統的な教育の取り組みに向けて

①「ふるさとを愛し、ふるさとの中で生活している自分を見つめ、ふるさとの未来と自分たちの夢を創造していける子ども」の育成をめざしたキャリア教育の連携を図る。

- ・【実践事例】小学校の活動と連携させ、地域をふるさととして卒業した先輩にメッセージを送る活動を通し、地域と自分たちの将来について再考する機会を作った事例



相手の担当者を分担



メッセージを記入

この地域の学校に在籍し、県外で学生として学んでいるがコロナの流行により帰郷できない若者に応援のため支援物資を送ろうという構想が地域より出された。学校営協議会の一員である公民館主事の仲介により、和田小学校からは地域の活性化のために行っている茶摘みで作られたお茶を提供。遠山中学校からは受け取る先輩一人ひとりに、手

書きのメッセージカードを作成し同封し送付した。

メッセージをつけたお茶は和田小学校児童が摘んだものであり、小学校のPTA会長が教室を訪れ、小学校での活動の経緯を生徒に説明してくださった。

この地域で一緒に過ごした当時の姿を思い出し、地域を離れ都会でがんばっている様子を想像し、将来の自分自身の姿と重ね合わせメッセージを書くことができた。

《中学校生徒の感想》

- ・手紙を書くことは難しかったけれど、気持ちを込めて書くことができたので良かったです。

・自分たちの気持ちが届いて、少しでも多くの先輩が遠山に戻ってきてくれるとうれしいです。

②「自分で考動（自分で考え、判断して、行動する）できる子ども」の育成をめざし、防災と安全に関わる連携を図る取り組み。

・【実践事例】保育園2園、小学校2校、中学校1校が地震などの大規模災害の場合を想定した合同避難訓練を実施。非常時の対応について全体に指導をした事例。

本年度、より実際の場面を想定した訓練となるよう、非常時の連絡体制、避難場所での安全確保の見直し、更にコロナ対応について追加した案を作成。8月7日（金）各園・各学校・自治振興センターの担当者による計画案の確認の会合を持った。

実施後、3校の連絡体制の確認と、災害で道路が寸断された場合の対応などについてより現実に即したものにするため、再検討が必要であることが出され、次年度担当者に託した。

（4）「組織の構築」飯田コミュニティスクールの充実に向けて

①学校運営協議会を通じて、「めざす子ども像」の実現に向け「学校ですること」「家庭ですること」「地域ですること」の相互承認をを行い、めざす子ども像の実現をはかる取り組み。

②中学校区で校長会、教頭会、学校運営協議会等を行い、小中連携した活動ができるようにする取り組み。

・【実践事例】3校合同の研修会を定期的に持ち、意識共有を図る取り組みを進めた事例

遠山中学校区の小中連携一貫教育については、平成25年の探索期に作成された全体イメージ図をもとに3校が1年ごとに当番校を交代して、活動を推進してきた。本年度当初、新型コロナウイルスの流行により会合をひかえたため、取り組みの全体像を見返すきっかけを得ることができた。



E S D研修会の様子

本年度当番校を中心に、①めざす子ども像の実現に向けた取り組みについて、現在の各校の実践にあわせた改訂を行う。②小中連携・一貫教育の縦糸の連携と飯田コミュニティスクールの横糸の連携がわかるような構造を明示することを目指し、原案を作成・提案し検討を行った。

あわせて、3校で一致して取り組むE S Dを核とした取り組みの基礎知識を得るため、3校の職員が月1回のペースで、麻布大学の小玉先生を講師に、研修会を実施している。また、地域学習・I C T・児童生徒指導のプロジェクトリーダーを各校より選出し、活動日程作成などの準備を始めている。

4 課題

（1）授業改善

・I C Tの活用は、小・中それぞれのやり方ですすめられている。今後、効果的な活用や、活用の成果を得るためには、職員・生徒の技能の習熟。場面設定。交流相手の精選。など、3校職員の情報交換の機会をとり多くの事を試し、経験を共有する必要がある。E S Dについても同様。

・タブレット端末の再配布を念頭に、家庭で安全にかつ効果的に活用する手立てを作り出すとともに、学校での授業の進め方についても反転授業の試行・導入など検討・準備する。

（2）人間関係づくり

・不登校、不適応の生徒についての情報交換や、授業見学の機会が十分ではなかった。次年度は計画的にすすめていくようにして、児童・生徒の様子との把握と、早めの対応に心がける。

（3）9年間の教育課程

・9年間の教育課程のカリキュラムづくりは継続して行う。これが指導として実践・機能するものであるように、振り返りと検証を平行して進める必要がある。また、地域教育・I C T教育に関わるカリキュラムの作成を次年度より行っていく。

（4）組織の構築

・地域教育の柱として、3校で連携してE S D教育を推進する。そのために、年間計画の中に3校の先生方全員が意識して学習を進めていくための研修や、計画を推進する役割を、3校校長会・教頭会が担う。継続的に取り組みが行われるよう、組織の再検討を行う。